

キャンプ研究

第20巻

2017年2月発行

Japan
Journal of
Camping
Study

Vol.20

Feb. 2017



未来テクノ株式会社

～各種テント・防衛省装備品・海洋土木製品～

<http://www.mirai-techno.jp/>

東京本社 〒103-0005 東京都中央区日本橋久松町9-9 SCI日本橋ビル9F TEL: 03-3663-7886

FAX: 03-3663-7899

江刺工場 〒023-1131 岩手県奥州市江刺区愛宕字西下川原240-1

胆沢工場 〒023-0402 岩手県奥州市胆沢区小山字中油池137

水沢工場 〒023-0402 岩手県奥州市胆沢区小山字附野71-1

キャンプ研究

第20巻 2017年2月15日発行

目次

実践報告

- 野外救急法を取り巻く最新の動向 3
岡村 泰斗・高山 昌紀
- ろう児のキャンプにおける親プログラム実践の成果と考察 11
廣瀬 彩奈・久保香菜子

講演録

- 第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会 基調講演 19
— Organized Camping in Japan —
星野 敏男

特別寄稿

- 組織キャンプの先駆者小西孝彦が残したもの 29
石田 易司

資料

- 「キャンプ研究」投稿規程 41
- 「キャンプ研究」収録題目一覧 44
- CAMP MEETING IN JAPAN 発表題目一覧 48

編集後記

実践報告

野外救急法を取り巻く最新の動向

Lasting Situation in Wilderness Medicine

岡村泰斗 (backcountry classroom Inc.)・高山昌紀 (Asobenture Life Japan)

Taito OKAMURA・Masaki TAKAYAMA

1. はじめに

野外救急法とは、1) 医療機関に引き渡すために長時間要し、2) きびしい環境に曝され、3) 専門的な医療器具に制限があるような条件下での救急法である¹⁾。2016年現在において、我が国は、Slipstream Japan, Wilderness Medical Associate Japan; WMAJ, Wilderness Medicine Training Center; WMTC (提供機関: backcountry classroom Inc.)の3団体が、日本人向けにコースを開催し、(社)日本山岳ガイド協会は、会員向けに、危急時対応として、野外救急法を含む講習を、2年に1度義務化している。

国外では、アウトワードバウンドのインストラクターは、100%WFRが義務づけられており²⁾、Wilderness Education Associationが示す野外指導者のカリキュラムにも、WFRの取得が前提条件となっている³⁾。つまり、野外遠征活動を行う団体では、すでにWFRの取得がコモンスenseとなっている。さらに、全米の組織キャンプを統括する、American Camping Associationが示すキャンププログラムの公認マニュアルにも、2012年より、救急車が到着するまでに30分以上かかる場所では、スタッフがWFAの資格を有していることが定められている⁴⁾。また、ボーイスカウトアメリカ連盟でも、14才以上のスカウトリーダーに対して、WFAの資格を義務づけている⁵⁾。

我が国で行われるいる野外教育プログラムの中には、短時間^{*1}に救急車が到着することができず、自然環境の中で、専門的な医療器具がない場所で行われるものがあることは明白である。これ

まで、主催団体、指導者の自己研鑽によってプレホスピタルの応急処置を行ってきたが、これらの国際的な動向から、今後我が国でも、各組織、統括協会及び、野外業界全体として、体系的に救急法の標準化を進め、社会に対し説明責任を果たさなければならないときが来るのも時間の問題と言えよう。

2. 野外救急法小史

Tilton & Hubbell⁶⁾が、著した“Wilderness First Responder”には、野外救急法の歴史として以下のように記されている。

北米において、開拓時代は、ほとんどの治療が、野外救急法であった。また、近代における戦渦は、まさに野外状況となり、野外救急法の技術が発展した。

1905年に、米国赤十字が発足し、プレホスピタルにおける応急処置の講習が全国的に広まった。その後、全米ハイウェイ安全法の制定により、プレホスピタルに長時間を要するハイウェイの事故に対して、救急救命処置が確立され、救急救命士が誕生した。さらに、北米心臓協会は、CPRの技術を開発し、全国的に講習が開始された。

戦後の経済成長と、余暇の拡大により、野外で余暇を過ごす人たちが激増した。それに伴い、野外における病気や怪我も大きな社会問題となった。1950年代には、米国赤十字が、登山者向けの野外救急法プログラムを開始するものの、体系的なテキストがなかったが、1967年に、James Wilkerson 医師により、初の野外救急法のテキス

ト「登山医学」が出版された。

1970年代になると、野外教育の分野でも野外救急法の普及は加速化し、1977年には、アパラチアンサーチ&レスキューが、バージニア大学で野外救急法のクラスを開始し、National Outdoor Leadership School; NOLSは、野外指導者に対して、野外救急法コースを提供し始めた。

1977年2月、野外指導者に対して、野外救急法を専門に指導する組織として、Stonehearth Open Learning Opportunities; SOLOが、ニューハンプシャー州に設立し、そのテキストである「野外救急法」の著者であるWilliam Forgey医師は「野外救急の父」と称されることとなった。1984年にWFRカリキュラムを完成させ、1985年には、アウトワードバウンドに対する最初のWFRコースが行われた。

1983年には、医師が中心となり、野外救急法に関する学術団体としてWilderness Medical Society; WMSが設立し、野外救急法は医学界においてステイタスを得た。同時に、Wilderness Medical Associates; WMA、Wilderness Medical Institute; WMIなど数多くの野外救急法プロバイダーが次々と誕生し、野外指導者が野外救急法資格を取得する環境が着々と整った。

3. WFA/WFR 実践ガイドライン

2010年10月(2012月12日改訂)、北米の主要な野外救急法プロバイダーが一同に会し、野外救急法資格の標準化を目的とし、Scope of Practice for WFA & WFR(以下SOP)の調印が行われた。このガイドラインを共同開発し、批准する団体は次の通りである。Wilderness Medical Associates、Wilderness Medical Institute、SOLO、Wilderness Medicine Training Center、Aerie、Wilderness Medicine Outfitters、Remote Medical International、Desert Mountain Medicine。これらの団体間では、資格の更新、互換が可能となっている。

SOPの締結により、これまで団体間で必ずしも統一的な見解が得られていなかった野外救急法の資格内容についても、未だ、団体間で若干の違いはあるものの、概ね以下のように定められた⁷⁾。

1) Wilderness First Aid

- ・主としてレスキューと連絡をとることのできる日帰りの野外指導者が対象
- ・事故発生から8時間以内にレスキューが到着する
- ・事故発生から12時間以内に医療機関に引き渡すことができる

2) Wilderness Advance First Aid

- ・主としてレスキューと連絡をとることのできる数日間の野外指導者が対象
- ・事故発生から12時間以内にレスキューが到着する
- ・事故発生から24時間以内に医療機関に引き渡すことができる

3) Wilderness First Responder

- ・主としてレスキューと連絡をとることができない数日間の野外指導者が対象
- ・事故発生からレスキューが到着するまで12時間以上かかる可能性がある
- ・事故発生から医療機関に引き渡すまで24時間以上かかる可能性がある

SOPでは、WFAとWFRについてのみ、必須カリキュラムが示されている。以下、SOPに示されているWFAの条件である⁸⁾。なお、WFRに関しては同ガイドラインを参考にされたし⁹⁾。

WFA 概要

WFAコースは、医療の専門家のためのコースではない。

- ・応急処置に副次的な責任をもつ者
- ・より高度な訓練を受けたもののアシスタントとして動く者
- ・人々を野外でガイドする能力があり、効果的な危機対応ができる者
- ・個人、家族、友人と旅行に行く者

以下の状況における

- ・救助隊が8時間以内に到着し、その助けを受けて避難を行うことができる
- ・日帰り、キャンプ、定住型のウィルダネスキャンプ、週末の家族旅行、キャンプ場などのフロントカントリーの野外レクリエーション

以下の資格が追加が必要である

- ・成人、子どもの CPR

- ・ AED

定義

- ・コア：WFA 取得者に期待されるスキル

- ・選択：特別な参加者に対する補足的なスキル

コース概要

- ・WFA は、実践や実技練習を中心とする 16 時間のコースである。コアトピックを網羅できる最小限の時間である。

コアスキル

- ・怪我や変形を同定できる全体検査、傷病歴と共に、兆候、症状、バイタルサインの評価

- ・活動、環境による傷病の予防

- ・緊急事態を安定化するための処置（固定、創の処置、脊椎固定、体温調節）

- ・持参薬を用いた傷病者のケア

- ・避難レベルの適切な判断

薬品

WFA 取得者は、個人の処方薬（ニトロ、アスピリン、吸引器）を持っている傷病者のケアを、医師の指示のもととするかもしれない。WFA 取得者は、傷病者が、処方薬を服用すべきかすべきでないか、判断すべきではない。

以下は WFA に含まれない

- ・牽引固定

- ・創の縫合

- ・アナフィラキシーに対するエピペン以外の処方薬

- ・注射減圧

- ・挿管

- ・野外での止血帯の解除

- ・複雑な疾病評価

訓練による付加的スキル

- ・肩と膝蓋骨の受動的整復

- ・脊椎評価と固定

コアスキル

傷病者評価と BLS

- ・全体評価（安全性の評価）

- ・一次評価

- 呼吸器系

- 基本的な BLS 技術か回復体位による気道確保

- マスクによる適切な換気

- 循環器系

- 心拍数と生命兆候の評価、胸骨圧迫、もし可能であれば AED

- 直接圧迫、バンテージ、止血帯を用いた深刻な出血の止血

- 神経系

- 意識レベルの評価、脊椎損傷の理解とマネジメント

- 意識のない傷病者の気道の確保

- ・二次評価

- 怪我や変形を同定する全身検査

- バイタルサインの測定と観察（意識、心拍数、呼吸数、皮膚）

- 傷病歴の聞き取り

- 傷病者の変化の観察

- 収集したデータと評価と処置の記録

- ・避難の計画、実施と、救助への連絡

以下は含まれない

- 血圧の測定

- 肺の音の評価

- 瞳孔の評価

- 複雑な疾病の評価

- 挿管

- 注射減圧

循環器系

- ・ポリウムショックの一般的な原因の同定

- ・ポリウムショック兆候と症状の認識と、交感神経性急性ストレス反応との違いの同定

- ・処置

- 意識のある傷病者に対する経口の水分補給

- 怪我の安定化

- 直接圧迫や、バンテージや止血帯による外出血のコントロール

- 厳しい環境からの保護

- ・ポリウムショックの危険がある傷病者の避難開始

- 体液の損失が止められない

- 好ましくないバイタルサイン

- 体温の維持ができない

心疾患

- ・兆候と症状の認識

- ・処置

- 運動中止

- 意識がある傷病者に処方薬（ニトロ、アスピリン）の処方

・避難と救助要請

呼吸器系

- ・一般的な原因と、呼吸不全（喘息、気道閉塞、外傷）の兆候と症状の認識
- ・処置
 - 楽な体位
 - 気道と換気の確保
 - 処方薬（吸引器）を用いた傷病者ケア
- ・深刻な呼吸不全の危険がある傷病者の避難開始
 - 呼吸不全が改善されない
 - 処置に関わらず症状が悪化する
 - 不自然な心理状態

以下は含まれない

- 喘息の処置へのエピネフィリンの使用

神経系

- ・主な原因（外傷、温度、低酸素、低血糖、発作）を理解する。
- ・頭痛、警戒的な心理状態の兆候と症状を理解する。
 - 意識あり＋警戒
 - 意識なし
 - 脳震とう、錯乱
- ・頭痛に対する一次処置
 - 気道確保
 - 脊椎固定
 - 厳しい環境からの保護
- ・外傷のない不自然な意識状態
 - 経口の糖質
 - 高温環境での冷却
 - 軽度低体温に対する加温
 - 低酸素に対する換気、酸素吸入
 - 傷病者の保護（気道、脊椎、環境）
- ・深刻な神経系の障害がある傷病者の避難開始
 - 警戒的な意識状態、錯乱
 - 意識の低下
 - 処置をしても改善がない

脊椎損傷

- ・脊椎損傷のメカニズムを理解する。
 - 意識喪失がある落下
 - 強い力のかかった外傷（MVA、クライミングのフォール、スキー、マウンテンバイクの

転倒）

- 3フィート（1メートル）以上からの落下
- 頭部や臀部からの落下

・脊椎損傷の兆候と症状を理解する

- 脊椎の圧痛
- 末端の運動神経、感覚神経の損失
- 意識ない、不自然な意識状態
- ・処置
 - 脊椎の安定化
 - 傷病者を検査、保護するのときに、ロール、リフト、牽引
- ・脊椎損傷の危険の高い傷病者の避難では輸送の方法を適切に判断する

創

- ・命の危険ある出血を理解する
- ・単純な創とハイリスクの創（汚染、海洋、複雑な創、関節の開放、咬傷）を区別する。
- ・処置
 - 直接圧迫や、バンテージや止血帯による出血の統制
 - 創の洗浄（高圧洗浄、ポピドン溶液）と保護
 - バンテージによる圧迫
 - 水疱の処置
 - 異物が刺さった創の処置
 - 気道の異物の除去
 - 刺さった異物を除去して良いのは四肢のみで、異物の安定化ができず、簡単にとれてしまい、異物が原因で出血の統制ができない場合に限る。
- ・局所、全身感染の兆候と症状を理解する
 - 局所感染の処置：保温パック、膿の促進、観察
 - 全身感染の処置：同上に加え、避難
- ・予防：MRSA、衛生管理

熱傷

- ・表層と深層の違いを理解する
 - 深さ：表層か深層
 - 広さ
 - ハイリスクな場所：掌、足の裏、顔、気道、股間
- ・処置
 - 冷却、衛生、保湿、粘着性のあるバンテージをしない

○避難の判断

- ・ 予防：日焼け、熱湯
- ・ ハイリスクな創、熱傷の避難。ほとんどの熱傷は、傷病者が不快であり、遠征を継続することができないため避難する。

以下は含まれない

- 縫合
- 生命の危険のある止血帯の開放
- 処方の抗生物質の投与
- 筋骨格系の怪我
- ・ 筋骨格系の怪我の兆候と症状の認識と、安定した怪我と不安定な怪我の区別
- ・ 筋骨格系のハイリスクな怪我の理解
 - 大腿骨、骨盤の骨折
 - 開放骨折
 - CSM（循環 / 感覚 / 運動）障害
 - 主要器官系（循環、呼吸、神経）の関与
- ・ 処置
 - 安定して怪我に対する RICE と、必要に応じてテープの処置
 - 不安定な怪我に対し
 - 長骨の解剖学的に正しい位置への牽引
 - 関節の可動域の中角度への牽引（CSM 障害がない場合）
 - 長期の固定と、血流を妨げない、安定して、不快感のない固定
- ・ 不安定な怪我に対する避難

以下は含まれない

- 大腿骨に対する牽引固定

アレルギー反応

- ・ 局所アレルギー反応の兆候と症状の理解
- ・ 処置
 - 局所アレルギー反応 - 冷却、圧迫、局所コルチコイド
 - 中度アレルギー反応：経口の抗ヒスタミン
- ・ 緊急避難の検討

アナフィラキシー

- ・ アナフィラキシーの兆候 / 症状の理解
- ・ 処置
 - エピペン、抗ヒスタミン、避難

以下は含まれない

- アンブルやバイアルからのエピネフィリン投与

○コルチコステロイドの投与

熱障害

- ・ 熱中症 / 脱水症 / 熱射病の兆候と症状の理解
- ・ 処置
 - 熱中症 / 脱水症
 - 経口の補水と電解質
 - 改善がない場合は避難
 - 熱射病
 - ただちに積極的冷却
 - 避難
- ・ 予防：要因となる天候の同定と予防策
 - 補水 / 過補水の防止

低体温

- ・ 軽度から重度の低体温症の兆候と症状の理解
- ・ 処置
 - 軽度低体温症
 - 補水、カロリー、低温環境からの保護
 - 改善がない場合は避難
 - 重度低体温症
 - 熱損出の阻止（ハイポパッケージ）
 - 安静、避難
- ・ 予防：要因となる天候の同定と予防策

落雷

- ・ 予防：ハイリスクな状況の理解と予防策
 - 地域の天候の理解、そばにいるか
- ・ 処置
 - 問題の処置、避難の開始

溺れ

- ・ 処置
 - 問題の処置、特に：
 - 呼吸停止
 - 脊椎損傷
 - 低体温
- ・ 脳震とう、呼吸不全がなくともすべて避難
- ・ 予防：ハイリスクな状況の理解と、個人の安全を考慮した予防策

一般的な疾病

- ・ 避難の必要なレッドフラッグの兆候と症状の理解
 - 腹部の痛み（局所の圧痛、発熱、嘔吐、12 時間を超えて悪化）
 - 嘔吐 / 下痢（出血、発熱、圧痛、摂取量以上に排出）

- 血液の混じった便、尿、嘔吐
- 咳 / URI (呼吸不全、発熱、濃い痰)
- UTI (発熱、背中痛み / 圧痛、嘔吐)
- ENT (視覚障害、発熱、気管不全)
- 発熱 (不自然な心理状態、頭痛、異変)
- ・ 予防: 衛生管理 (手洗い、調理)、水の浄化

以下は含まれない

- 一般的な疾病における詳細な病態学、兆候、症状、処置

選択項目

選択項目は、特定の受講者のニーズに応じて加える。局所低温障害、高度障害、毒へび、毒虫、海洋性の危険生物、脱臼、脊椎評価。

脱臼

- ・ 特定の対象に対する選択項目
- ・ 肩の脱臼の受動的整復
- ・ 膝蓋骨の受動的整復
- ・ 指の脱臼の整復

以下は含まれない

- 骨盤、肘、足首、手首、膝

脊椎評価

- ・ 16 時間の WFA コースで脊椎評価 (NEXUS/ 修正版カナダ NEXUS) を正しく理解し、正確に実践するのは難しい。WFA プロバイダーは、脊椎評価と脊椎固定をカバーするプログラムを状況に応じて補足する。

末梢低温障害 (凍傷 / 非凍結性低温障害)

- ・ 凍傷と非凍結性低温障害の兆候と症状を理解する。
- ・ 処置
 - もし凍結していなかったら、加温
 - もし凍結していたら、温水 (37-39°C) で加温
 - 再凍結からの保護、放射熱による加温とマッサージの禁止
- ・ 水疱ができたなら避難、患部の使用の禁止、再凍結の保護
- ・ 予防: 要因となる天候の同定と予防策

高山病

- ・ 高山病 (AMS) の兆候と症状と重度高山病 (HACE/HAPE) の要因の理解
- ・ 処置
 - 症状が出たら登行の中止

- 改善しなかったら下山
- 呼吸不全 (HAPE) や、運動失調 / 心理状態の変化 (HACE) があつたら、ただちに下山
- ・ 呼吸不全 (HAPE) や、運動失調 / 心理状態の変化 (HACE) があつたら避難
- ・ 予防: 要因となる天候の同定と予防策

以下は含まれない

- 高山病予防薬の処方

中毒

- ・ 一般的な野外毒の理解
- ・ 処置
 - 接触性中毒: ケアと避難、中毒センターに連絡
 - 吸引性中毒: 安全場所に移動、酸素吸入
- ・ 予防

毒へび

- ・ 処置
 - 患部の固定 (圧迫の禁止)
 - 根拠のない、信用のない処置を避ける (冷却、吸引、電気刺激、止血帯、圧迫、肉たたきなど)
 - 病院に緊急避難
 - 毒反応の観察
- ・ 予防: 毒蛇に咬まれる人間の一般的な行動を理解する。

以下は含まれない

- 根拠がなく、問題となる処置 (吸引、圧迫、冷却など)

毒虫

- ・ 予防策 (服装、防虫ネット、虫除け、殺虫剤)
- ・ 対処療法
- ・ 湿疹、発熱、頭痛がある場合は避難
- ・ サソリに刺された場合緊急避難と抗毒素の投与

海洋性の毒生物

- ・ 適切な処置
- ・ 刺胞毒の処置 (クラゲ、サンゴ、イソギンチャク)
 - 塩水で残った刺胞を洗い流す。温水か、アルコール、酢に浸し、残った刺胞をこそぎとる。
- ・ 刺傷の処置 (カサゴ類、エイ、ウニ)
 - 温水で痛みがなくなるまで 30-90 分間浸す。一般的な創の処置。
- ・ 避難: もし痛みが治まらず、湿疹が悪化し、リンパ節にそって赤みが広がる場合。または、患

部が赤く腫れ、痛み、圧痛がある場合。

野外プログラムのプロバイダー、及び指導者は、各自の提供、指導する野外プログラムに準じ、WFA、WAFA、WFRの資格を選択する。我が国の山岳環境や、救助体制の整備から、もし通信手段が確保されていれば、医療機関に引き渡すまでにWFAのタイムリミットである12時間以上要するケースは考えにくい。一方で、いかに多くの山域が携帯電話通話可能になったとしても、必ずしも安定的でないことや、むしろ里山環境において、通信環境が未整備なところも多いことから、野外状況において、常にWFRのスキルが必要な状況に陥る可能性があることを留意されたい。

4. まとめ

Nicolazzo¹⁰⁾は、野外プログラムのプロバイダーの法的防衛力を高めるために次の点を挙げている。1) 業界基準、2) 参加同意書、3) 顧問医師、4) 適切な救急資格、5) SOAP ノート、6) 通信手段、7) 緊急時対応、8) 法令遵守を挙げている。これらと比較し、我が国の野外プログラムプロバイダーを取り巻く社会状況は、1) 国内基準の整備、2) 医療従事者の公的な参画、3) 野外救急法プロバイダー、インストラクター、コース、及び開催地域の拡大など、解決に多くの時間を要す問題が残されている。一方で、同氏は、野外指導者個人の法的防衛力を高めるためには、1) 適切な資格の取得、2) 知識とスキルの維持、3) SOAP ノートによる記録、4) 所属団体の手順の遵守、5) 法令遵守を挙げている。つまり、野外教育者個人として、国際スタンダードを満たすことは、個々の意識で十分に可能なところによくたどりついた。

引用文献

- 1) Tilton B. & Hubbell F. (1998) the Wilderness First Responder, The Grobe Pequot Press, p.1.
- 2) Isaac J. (1998) Outward Bound Wilderness First-Aid Handbook, Falcon Guides, p.xii.
- 3) Pelchat C. (2015) Commission on Outdoor Education and Leadership Accreditation Manual, Wilderness Education Association, p.103

- 4) American Camping Association (2012) Accreditation Standards for Camp Program and Services, American Camping Association, p.54-55.
- 5) Boy Scout of America (2016) Wilderness First Aid-What Is It and Why Should You Care?-,http://www.scouting.org/scoutsorce/HealthandSafety/Training/wilderness_fa.aspx
- 6) 前掲書 1), p.2-3
- 7) Wilderness Medicine Training Center (2016) Introduction of Wilderness Medical Courses,<http://www.wildmedcenter.com/introduction-to-wmtc-medical-courses.html>
- 8) David J. et al.(2012)Minimum Guidelines and Scope of Practice for Wilderness First Aid,http://www.wildmedcenter.com/uploads/5/9/8/2/5982510/wfa_sop_v_dec_2012-1.pdf
- 9) David J. et al.(2012)Minimum Guidelines and Scope of Practice for Wilderness First Aid,http://www.wildmedcenter.com/uploads/5/9/8/2/5982510/wfr_sop_v_may_2014.pdf
- 10) Nicolazzo P. (2014) the Art & Technique of Wilderness Medicine, the Wilderness Medicine Training Center Inc., pp.7-8.
- 11) 西川渉 (2012) 救急医療と時間基準 - 世界主要国のレスポンスタイムとその意義 -, 平成厚生労働科学特別研究事業, pp.1-12.

※注1：西川¹¹⁾によれば、世界主要国では、救急車の到着時間について、法令、ガイドライン、事業承認の条件として、遅くて15分、通常8分の到着時間を定めているところが多い。一方で、我が国は平均7.7分であるが、その基準が明確でないのが現状である。

実践報告

ろう児のキャンプにおける親プログラム実践の成果と考察

The result and consideration about practice of parents' program in Camp for Deaf children

廣瀬彩奈（埼玉県立特別支援学校坂戸ろう学園）・久保香菜子（坂戸クラブ）

Ayana HIROSE・Kanakano KUBO

1. はじめに

『坂戸クラブ』は、埼玉県立特別支援学校坂戸ろう学園を拠点に、毎月1回土曜日にろう・難聴の子どもたちが活動する「土曜クラブ」として、2006年にスタートした。一部の教員や保護者有志、学生などのボランティアによって運営している。

坂戸クラブでは年1回、夏キャンプを実施しており、2015年で9回目を迎えた。キャンプの活動内容については、予約した施設の自然環境とその年の参加者の状況及びキャンプスタッフの力量に応じて設定している。活動内容は毎年異なるが、“ろう者によるろう児のためのキャンプ”というスタイルは一貫しており、キャンプの方向性として当事者性を反映させることを意識している。

キャンプでは1泊2日という長い時間を共に過ごすこともあり、「会話が見えるキャンプ環境づくり」をスタッフやボランティア、参加する保護者に呼びかけている。例えば、聴の大人同士で会話する時も手話で話すことを大切にしている。これらの「見える情報」はろう児にとっては状況や行動を判断する材料になり、情報のインプット量が対等になることで自由な自己表現を可能にし、お互いに気持ちを共有しあうことを容易にする。こうしたコミュニケーション環境があって初めて、自然の本質を感じる体験を提供することができる。

近年では、小学生の時にキャンプに参加していた子どもが中学生になってからサポーターとして

参加してくれるようになり、こうした縦のつながりを通して、ろう児のキャンプにおけるスキルや、それぞれのキャンプに対する思いが次世代に継承されつつある。

本報告では、2014年夏に実施したキャンプで導入した親プログラムの実践内容と評価について述べる。障害児キャンプに親プログラムを取り入れた例では、発達障害児を対象としたキャンプにおいて親が子どもの行動を客観的に観察する機会をもち、親同士で支援方法を共有しながら子どもプログラムを実践することで、子どもの適応行動に導いたという報告がみられる（金山, 2010）¹。本実践においては、親自身がろう者によるレクチャーを受けながらプログラムを体験し、ろう児の野外活動における支援方法について親同士で共有しながら子どもプログラムの提供を行なった。

2. 実践概要

2.1. キャンプの概要

（日時）2014年8月23～24日

（場所）埼玉県青少年総合野外活動センター

（参加者）

- キッズ（小学部）：18名（低学年10名、高学年8名）
- ベビー&ペアレント（0～5歳児の未就学児とその保護者）：7組
※未就学児1名につき保護者1名の同伴
- 親（上記の未就学児保護者を含む）：15名（内、ろう者4名）
- サポーター（中学生以上）：18名（内、ろ

う者 9 名)

- スタッフ (高卒以上) : 5 名 (内、ろう者 2 名)

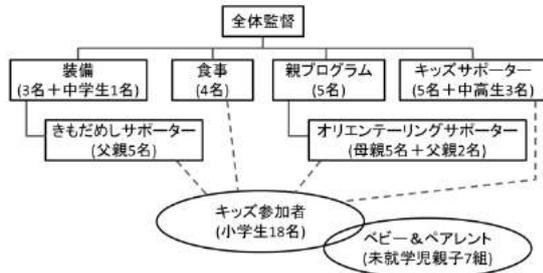


図 1 キャンプ組織体制

2.2. 親プログラムの概要

1 日目はキッズ (小学部) と親のそれぞれにプログラムを実施した。親プログラムの流れとしては、1 日目の午後 (14 時半～ 16 時) に野外講座を実施し、親自身がろう者講師によるネイチャーゲームを体験しながら、施設周辺の自然環境コース (山道など) を歩いた。そのプログラムをもとに、1 日目の夜に親同士で打ち合わせと準備を行ない、2 日目の午前 (8 時半～ 10 時半) に親が子ども達に対してプログラムを提供した。

1 日目の午後の野外講座では、ネイチャーゲームの体験だけでなく、2 日目のオリエンテーリングプログラムのためのコースの下見やチェックポイントの確認を兼ねた。そのつど、子ども達の野外活動時の注意点についても確認し合えるようにした。親自身が「直接体験」し、ろう児への野外活動プログラム提供を考える上で重要となる「意識を共有」することを目指した。

講座中は親達 4～5 人のグループに分かれ、グループでネイチャーゲームを体験してもらった。5 か所のチェックポイントをつくり、それぞれの場所で可能なネイチャーゲームを 7 つ提供した。

最初に親達に、自分がろう児の立場になったつもりで、どの提示方法が分かりやすいかを考えてもらいながらネイチャーゲームに参加するというを確認した。ゲームを始める前の子ども達に対する注意喚起として、野外に潜む危険に対する注意事項、走らないようにすること、グループから離れないようにして行動することを挙げた。

表 1 プログラム内容 (太枠…本報告内容)

	時間	キッズ (小学部)	親
8月23日	14:00	到着	
	14:30	企画	野外講座
	16:30	夕食づくり	ろう者による講演会
	18:30	夕食	
	20:00	きもだめし	
	21:30	花火 就寝	打ち合わせと準備
8月24日	6:30	起床 朝の体操	
	7:00	朝食	
	8:30		オリエンテーリング (親によるプログラム提供)
	10:30	自由遊び	
	12:00	昼食	
	13:00	帰りのあいさつ	
	13:20	出発・解散	

ネイチャーゲームについては、ろう児にとって視覚的に分かりやすく、主体的に自然発見を楽しむことができるゲームや、手話の基本要素である CL (Classifier : 類別詞) を活かしたゲームを採り入れた。それぞれのゲームは、グループ内で相談や確認が必要となる方法にし、グループ内でのコミュニケーションを深められるようにした。採り入れたネイチャーゲームは以下の通りである。

①カモフラージュ

自然環境の中にあらかじめ隠しておいた人工物を探す。



写真 1 親の「カモフラージュ」体験

1 本報告で実践したネイチャーゲーム①～⑦のうち、日本シェアリングネイチャー協会の登録ネイチャーゲームは①、②、④、⑦である。

②フィールドビンゴ

グループごとにビンゴカード（図2）を1枚ずつ用意した。ビンゴカードは、未就学児も参加しやすいようにイラストをつけた。発見した実物をグループ全員で確認してから、色シールを該当する枠に貼る。



図2 「フィールドビンゴ」で使用したビンゴカード

③わたしの宝

1 グループで1つずつ、自然の宝と思えるものを落ちて自然物の中から探して持ってきてもらい、宝にした理由を説明しながら発表する。

④森の色あわせ

1 つのグループに対し1つの色カードを提示し、周辺の自然環境から似た色の自然物を探す。

⑤匂い探し

各グループで、いい匂いがする自然物を1つ探し、発表する。

⑥葉っぱじゃんけん

1 グループで3枚ずつ、落ちて葉っぱを集める。講師が「○○葉っぱ」（ふわふわ、やわらかい、厚い、など）を指示し、指示されたものに近い葉っぱを各グループで1枚決める。一番近い葉っぱを挙げたグループがじゃんけん勝ちになる。

⑦木の葉のカルタとり

いろいろな種類の葉っぱを白い画用紙の上に並べる。講師が1枚の葉っぱの形及び大きさ

をCLで示す。このCLが示している葉っぱはどれかを当てる。

これらのネイチャーゲームを通して、「自然は面白い！自分でも発見できた！」という喜びを共有できるようにした。また、キャンプ終了後も、親子で公園等でも楽しめるような内容にすることで、親子のコミュニケーションの1つとしてもネイチャーゲームを楽しめようにした。

2日目のオリエンテーリングでは、各チェックポイントで実施するネイチャーゲームを親達で相談して決め、準備をしてもらった。親自身で進行を行ない、各チェックポイントではそれぞれのゲームを担当する親達が待機した。子ども達は6グループに分かれ、グループごとに4か所のチェックポイントを回り、親達の説明を受けながらネイチャーゲームを体験した。



写真2 オリエンテーリング開始の前に、親が説明中



写真3 「フィールドビンゴ」で生き物の痕跡探し



写真4 色カードと、自分たちの探した葉っぱが同じ色かどうか、親が審査中



写真5 「大きな葉っぱ、あるかな？」

写真6 「つるつるの葉っぱ、見つけたよ！」
「どれどれ？」

3. 成果と考察

3.1. 親の介入プログラムの成果

参加した親のうち、ろう者は3分の1近くであったが、聴者の親でも手話ができ、ろう者に対する理解のある人が多かったため、子どもに対してのプログラム進行もスムーズであった。このような基盤があることで、スタッフだけでなく親も含めて全員で子どもを見守る体制ができ、野外活動における安全管理にも役立ったと思われる。

また、定例の坂戸クラブ活動で見慣れているスタッフではなく、自分達の親が説明をしてくれるということは、子ども達にとっては珍しかったようである。自分の親が家庭の中の会話とはまた違った話し方をしていることや、スタッフの手話とは違う話し方に興味をもち、説明を一生懸命に見ていた。ろうの親の方が子どもの興味を惹きつけるような説明のしかたに長けており、オリエンテーリング・プログラムの最後に疲れが出てきた子ども達にとっては、もはや聴の親の対応手話²で

² 手話には、日本手話と日本語対応手話がある。対応手話は音声日本語の文法にそって手話単語を当てはめたものであるが、日本手話は独自の文法体系をもち、ろう者にとっての自然言語である。

の説明は目に入らない状態であった。

このような親プログラムは、坂戸クラブの夏キャンプ9年目にして初めての試みであったが、親もキャンプに参加して自然体験だけでなくろう児との向き合い方について学ぶという意識付けができた。まず1日目の午後に、ろう児の野外体験について考えながら自身でプログラムを体験したこと、その日の夜に親同士で実践のしかたについて意見を共有し合ったこと、そして2日目に子ども達にプログラムを提供したことで、親自身へのフィードバックにもなった。

例年のキャンプでは、親は炊事等の裏方準備に専念しがちで、キャンプ中は子ども達やろう者スタッフとの関わりが薄くなり、キャンプを通してろうの世界にどっぷり浸かるという体験ができていたとは言い難い。本キャンプでは、野外講座の後に、ろう文化やろうの世界についての講演会（ろう者講師による）を実施したが、この2つのプログラムを通してろうの世界に対する意識がさらに高まったと思われる。次回の親プログラムでは、野外プログラムを実施する前に、ろう者による講演を最初に導入する形をとりたい。ろう者の講演を聴くことによって、これから始まるキャンプに向け、ろうとは何か、手話とは何かを考える契機となり、「キャンプ@ろうの世界」に入るための「アイスブレイク」にもつながるであろう。

3.2. ネイチャーゲームの可能性

ネイチャーゲーム体験は子どもだけでなく親自身も夢中になって楽しむ様子がみられた。「フィールドビンゴ」のビンゴカードにも導入した「モグラの巣」については、実物を初めて見る親が多く、親同士、モグラの巣探しに夢中になっていた。このように、親自身も童心にかえって自然の中でネイチャーゲームを楽しんでいた。この体験は、学校や家庭など日常生活に戻った後も、子どもと一緒にモグラの巣を探そうという気持ちにつながる。親が子どもに声をかけて一緒に自然を探そうとするなど、親子のコミュニケーションを広げる機会にもなる。

野外講座で親が体験した「木の葉のカルタとり」では、ろうの親に2枚の葉っぱの形の違いをCLで表現してもらい、いろいろな形をもつ葉っ

ばの多様性に気づくことができた。同じギザギザの葉っぱでも CL では細かな違いを表現することが可能であり、ろうの親にとっても新しい発見であった。

子どもに向けての実践プログラムでは、子ども達が集めてきた葉っぱの中に、親が指示する「○○葉っぱ」と同じものがあるかどうかを確認するゲームを親が考案し実践したが、指示する葉っぱの特徴を CL で表すよりも、実物の葉っぱをそのまま提示する場面が目立った。聴の親にとっては、葉っぱの CL 表現はレベルが高かったようである。この体験を通して CL のスキルアップの必要性を感じるきっかけになったと思われる。

このように、「キャンプ@ろうの世界」におけるネイチャーゲーム実践は、親子のコミュニケーションのきっかけ作りとなるだけでなく、ろう児・ろう者の視点を意識する契機となり、手話表現のスキル向上につながるなど、様々な可能性を示唆してくれた。

3.3. ろう児の野外活動プログラムへのフィードバック

ろう児の野外活動プログラムにおいては、山道を歩く際の情報伝達のしかたについて丁寧に説明する必要があった。親向けの野外講座において親だけで 1 列になって山道を歩いている時、「モグラの巣があったよ」と先頭にいるろう者講師が近くの人に伝え、さらに列の後ろを見渡し、遠くの列にいる人と目が合うたびに情報を伝えたつもりであったが、結局その場にいた全員がこの情報を共有できていなかった。本来は、先頭にいる人から伝えられた情報を、自分の後ろにいる人に次々に伝えていくような形が、ろう者のやり方であるが、そのやり方を知らない聴者が多く、情報が列の途中で途切れる状況が生じてしまう。ろう者と聴者の情報伝達のしかたの違いについて意識した上で説明することが課題である。

キャンプ終了後の親によるアンケートの記述内容を以下に挙げる。

- 親だけのオリエンテーリングはとても楽しめた。子どもから離れて、子ども気分に戻り、苦手な山登りが楽しかった。運動不足解消になりました。来年も、親だけのオリエンテー

リングをやりたいです。

- (親だけの)オリエンテーリングは楽しかった。久しぶり登山気分でした。
- 山歩きも貴重な体験で楽しかったのですが、サポートする大人の数が少なかったので少々危険な箇所があったので、もうちょっと大人の手があったら安全だったかな、と感じました。それとせっかくなので、100m 滑り台とかの遊具で、子ども達が滑る機会があっても良かったかなと思いました。大人が滑っても楽しかったです。

以上の感想から、親自身も野外活動を楽しんだ様子が伝わるが、子どもにどんな体験をして欲しいかを考える視点がみられたのはアンケートに記入した 3 名のうち 1 名だけである。単に面白かったという感想で終わるのではなく、子どもの野外活動におけるねらいと留意点について、親のフィードバックを図る機会があると良かった。親対象の野外講座を通して、ろう児の野外活動における注意点やろう児に伝わる提示のしかたを振り返るとともに、親自身が自然に対して感じたことを子ども対象のプログラムに還元できるようにしていく必要がある。

4. まとめ

本キャンプの親プログラムで見出された成果をまとめると、

- ・親がプログラムを進めるという物珍しさ
- ・親だからこそできるプログラム作りの可能性
- ・親としてのろう児との向き合い方や、ろう児とのコミュニケーションを広げる機会
- ・手話のスキルを磨く 1 つである CL を活かしたネイチャーゲームの可能性
- ・野外活動におけるろう児対象のプログラムの注意点とねらいをスタッフとともに共有するきっかけ作り

が挙げられる。1 日目の親自身による野外体験を通して、「直接体験」をし、それとともにろう児への野外活動プログラムの進め方に関する「知識」を知り、親同士で「意識を共有」してろう児向けのプログラムを進めることができた。

一般的に子どもだけで参加するキャンプは、親の子離れ及び子の親離れを促し、子ども同士の世

界を形成・発展させる機会になるが、本キャンプでは親子で参加しつつ、親プログラムを提供することで、親と子の関係を考える良い機会になった。

親自身のフィードバックが十分ではなかったという課題がみられることから、本キャンプを通して、親自身の意識の変化が明確に表われたとは言い難い。本キャンプの親プログラムにおけるスタッフのねらいと親との間に、ろう児の野外活動に対する認識のずれが生じていた可能性もある。今後はスタッフ自身もキャンプにおけるろう児への教育的意義について認識を深め、親プログラムの実施においてスタッフと親がねらいを共有できるようにしていく必要がある。

引用文献

-
- 1) 金山好美 (2010) 体験型親プログラムを取り入れた発達障害児キャンプの効果、キャンプ研究、日本キャンプ協会、14(1)、44-45

講演録

講演録

第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会 基調講演

Organized Camping in Japan

星野敏男（日本キャンプ協会会長 明治大学教授）

Toshio HOSHINO

はじめに

今日の私のお話は、「日本のキャンプ」というテーマをいただきました。実行委員長の針ヶ谷先生からは「キャンプと文化の関係などにも触れてお話しいただきたい」ということでした。全体として、どのような話にするか、あれこれ迷いましたが、私は、大学の教員として、キャンプも含めた野外教育を研究してきましたので、前半部分は、日本のキャンプの歴史や日本のキャンプの特徴などについて触れ、後半部分は、私の専門研究分野である「野外教育」の視点から、私が組織キャンプをどう見ているか、組織キャンプについてどのようなことを考えているかについて話していこうと思います。

なお、この場で私が使うキャンプという用語は、主に青少年を対象に行われている教育的な組織キャンプ、いわゆる Organized Camping と呼ばれているキャンプを指していることをお断りしておきたいと思います。

1. 組織キャンプの歴史

日本の組織キャンプの歴史と特徴について紹介していきます。実は、この前半部分の話の一部は、2000年に日本で行われました、ICC2000（第5回国際キャンプ会議）の時にも紹介した内容です。最初に、簡単に日本のキャンプの歴史について紹介しましょう。

私たち日本キャンプ協会が設立されたのは、1966年、いまから50年前の事です。今年がちょうど50周年ということになります。日本キャン

プ協会が設立される前も、青少年のためのキャンプは、国内のいろいろなところで実施されてきました。日本における青少年を対象とした組織キャンプの始まりは、今から約100年ほど前になります。北米で行われていた組織キャンプをお手本に、1920年頃から日本では始められました。



初期のボーイスカウトキャンプ

この写真は、初期に行われた日本のボーイスカウトのキャンプの様子です。ここに紹介した写真は大変古い貴重なもので、それぞれの協会からお借りしてきた写真です。当時のYMCAキャンプ、ガールスカウトキャンプ、YWCAのキャンプです。日本の最初の頃の組織キャンプは、民間の青少年団体により推進されていました。当時の様子がかがいが知れます。第二次世界大戦中には、日本のキャンプも中断の時期がありましたが、戦後、ふたたび青少年のためのキャンプも復活しました。1953年には、文部省が「キャンプ



初期のY M C Aキャンプ



初期のガールスカウトキャンプ



初期のY W C Aキャンプ

指導の手引き」を発行し、学校教育や社会教育での青少年育成のためのキャンプを推進していました。第二次世界大戦後は、日本では経済も安定し、人々も生活にゆとりが出来ました。

スキーや海水浴など国民のアウトドアレジャーも盛んに行われていました。

2. 東京オリンピックとスポーツ振興法

戦後の日本社会における大変大きな出来事として、1964年開催の東京オリンピックをあげるこ

とが出来ます。東京オリンピック（1964）は、社会の隅々まで、とても大きな影響を及ぼしました。

オリンピック開催の少し前、1961年に「スポーツ振興法」という新しい法律が制定されました。この法律は、オリンピック開催に向けて、日本全体で各種のスポーツを振興することを目的に作られた法律です。日本のスポーツ界はもちろんのことですが、私たちがかかわるキャンプを含めた日本全体の野外活動に対してもとても大きな影響を及ぼしました。

この法律では、各種のスポーツの他、身体運動にかかわる徒歩旅行（ホステリング）、自転車旅行（サイクリング）、キャンプ活動（教育キャンプ、組織キャンプ）などの「野外活動」を振興させることも条文に書かれました、つまり、日本のキャンプは、スポーツ振興法の中で取り扱われましたので、法律上は、キャンプは「野外活動の一部」であり、野外活動は「身体運動としてのスポーツの一部」とされましたので、日本のキャンプは（行政的には）スポーツや体育として、長いあいだ扱われることとなりました。このことが、その後の日本の学校キャンプや林間学校で行われるキャンプにも大きな影響を及ぼしました。この法律の影響もあり、日本のキャンプは、集団宿泊訓練、登山やオリエンテーリングなどの体育・スポーツ的な身体運動をともなう野外活動と野外炊飯、キャンプファイアーなどがキャンプの定番として行われるようになっていきました。

また、一方で、東京オリンピックを間近にひかえ、国立大学の体育学部にも野外活動、野外運動などを専門に研究する講座、研究室が用意されました。東京教育大学（現在の筑波大学）体育学部に「野外運動研究室」が開設されたのが、ちょうど1964年、東京オリンピックの年でした。私がこの大学に入ったのは、研究室が出来て6年後の1970年ことです。

この写真は、私が大学生の頃のこの研究室の実習の様子です。右端が私ですが、その隣は、当時の研究室の先生であった長谷川純三先生です。現在も日本キャンプ協会顧問として活躍されています。他にも研究室には、梅田先生や、今回いらっしやっています齊藤保夫先生も教鞭を執っておら



学生時代

れ、飯田稔先生はアメリカ留学中でした。

日本のキャンプには、スポーツ・体育系の教員や研究者が多くかかわっているというのは、このように法律を含めた日本の歴史的背景があります。このような時代背景の中で日本キャンプ協会は設立されました。日本キャンプ協会は、1966年に全国各地の青少年関連団体や野外活動研究者、指導者、教育者などによって、キャンプの普及と振興、指導者養成・資格認定、調査・研究などを目的とする任意団体として設立されました。長谷川純三先生、齊藤保夫先生、そして関西の酒井哲雄先生など、戦後すぐからキャンプの復興に関わってこられました多くの先輩諸氏に、改めて、この50年間のご努力にお礼申し上げたいと思います。

3. 青少年教育施設と学校教育

話題を少し変えましょう。日本では、国や県が青少年教育施設を多数保有し運営しています。1959年(昭和34年)に皇太子殿下(現在の天皇陛下)御成婚記念事業として我が国最初の青少年教育施設(国立中央青年の家)が富士山の麓に開設されました。現在では、国立の青少年自然の家、青少年交流の家をはじめとして、都道府県、市町村立の活動センターなど青少年教育にかかわる国公立施設は全国に数百ヶ所以上あり、キャンプ場を併設している施設も数多くあります。

国や自治体が、青少年教育のための施設やキャンプ場の管理運営を行っているということは、おそらく、世界の中でも日本の特徴的なことの一つかと思います。青少年育成を目的にこれらの施設やキャンプ場を使用する場合は、食費以外は、ほ

とんど無償で(無料で)利用することができるため、数多くの学校や民間団体がこれらの施設を利用して、キャンプや野外学習、野外活動(登山やハイキング、各種のアウトドアスポーツ)を実施しています。

4. さまざまな日本のキャンプ

ICC2000の時に、日本のキャンプがどのような傾向にあるかお話しさせていただきました。その時は、日本のキャンプは一言で言うと、多様化していると紹介させていただきました。これは現在もそのまま続いています。1970年代から80年代にかけて、当時アメリカで行われていたキャンププログラムやその考え方がさまざまな人々により伝達されたことや環境意識や環境教育の広まりも影響があるとお話ししました。また、その後、日本では、NPO法が整備され、さまざまなキャンプ関係のNPO団体が設立されたことも大きな影響を及ぼしています。

現在日本のキャンプでは、冒険教育的活動や協力・協調型プログラム、それに、環境教育や地域の文化にかかわる活動など、数多くのキャンププログラムが提供されています。日本のキャンプが多様に展開されている背景には、多様な分野の人たちがキャンプに関わっていることが考えられますが、しかし、この多様さの一番の要因は、なんと言っても、日本の自然の豊かさが関係しているのだろうと私は考えています。

今回この場に世界各地から参加された方々は既に気づかれていると思いますが、日本は世界でも類を見ないほどに豊富な自然環境を有しています。春、夏、秋、冬の季節はもとより、山、川、海、湖、都市部から農山村まで、さまざまな季節、多様な場所でキャンプ活動を展開することが可能です。また、それぞれに地域固有の気候風土や長い歴史の中で培われてきた文化があり、田植えなどの農作業、里山での林業体験、伝承遊び、各地域の生活文化体験など、キャンプに取り入れることのできるプログラムが豊富に存在しています。各国が築き上げてきたキャンプ文化と我が国固有のキャンプ文化を交流、融合させることで、今後さらに新しい日本型のキャンプ文化が育っていくことに大いに期待しているところです。本大会後

のツアーも企画されています。みなさまにも日本の多様な自然と文化を味わっていただきたいと思っています。

5. 教育の視点から見るキャンプの意義や効果

さて、さらに話題を少し変えましょう。私は野外教育の研究者でもあります。今日は、これまで日本国内で発表されてきたキャンプに関わる研究結果や調査結果などを紹介したいと思います。ここに上げた教育効果は、多くの研究者の研究結果をまとめたものです。

キャンプの教育効果に関する研究は、これまで、さまざまな視点からの研究がなされ、多くの研究結果が報告されています。日本野外教育学会発行の「野外教育研究」や国立オリンピック記念青少年総合センターの調査結果報告書、日本キャンプ協会発行の「キャンプ研究」などでは、キャンプの教育的効果を扱った研究論文や研究報告が数多く掲載されています。これらの研究の中から、特にキャンパー個人の成長や変容に焦点をあてた研究で、教育効果が明らかにされたものを紹介します。まず、キャンプの教育的効果は、大雑把にまとめますと以下の三つに分類することができます。

- (1) 個人の成長、心理的側面の効果
 - (2) 他者とのコミュニケーションや社会的側面の効果
 - (3) 自然認識や環境行動の側面における効果
- さらに、具体的に実証された具体的項目では、以下のものが向上するとされています。

- ①達成動機の向上
 - ②自尊心、有能感の向上
 - ③自律心、我慢、責任感の向上
 - ④他者受容感・凝集性の向上
 - ⑤自己決定感の向上
 - ⑥自然意識・感性の向上
 - ⑦規範意識・学習意欲の向上
- 他者受容感・凝集性の向上など

この他にも、私たちがいま集まっています、このオリンピックセンターでは、青少年教育振興機構の本部があり「体験の風をおこそう運動」を展開しています。本部には研究センターもあり、青

少年にかかわるたくさんの調査を行っています。その調査結果では、子どもの頃に、生活体験、自然体験、社会体験などの「体験活動の経験が多い人ほどやる気や生きがいを持っている人が多い」という調査結果を報告しています。ここまで紹介してきたキャンプの教育効果は、データや数値として証明、実証されてきた効果です。他にもさまざまな研究データや調査結果、また、キャンパーへのインタビューや感想文などから分析する質的研究の結果などもあります。

これまで多くの研究者がキャンプについて研究を進めてきていますが、子どもたちがキャンプで成長する要因として挙げているものには、以下のようなものがあります。つまり、キャンプを通してよりキャンパーのより良い成長や教育的効果を期待するのであれば、次の要素をキャンプに盛り込むことが推奨されます。

1. 仲間との共同生活やグループで何かを成し遂げたり、解決したりする場面があること
2. 苦しいことや大変なことに自らチャレンジして成功する場面があること
3. 自然の中で本物の自然や自然物に直に触れる機会があること
4. グループや参加者がおかれた状況をよく把握し、支援ができる指導者が介在すること
5. みんなで一緒に暮らしを作ること
6. 一日の出来事や考えたこと、思ったことなどをみんなですりかえる時間を持つこと、などです。



図1 冒険教育におけるころの成長

この図(図1)は、冒険教育の分野で用いられている図で、子どもたちのころが少しずつ大きく広がっていく様子を図示したものです。

通常私たちは、安心で安全に居られる C-ゾーン (comfortable zone) 内で生活しています。キャンプでは、子どもたちに意図的にこの C-ゾーンから一歩踏み出す体験を提供します。さまざまな体験をしながら少しずつ少しずつところが成長していきます。身長の変化や体重の変化などは、数値で表すことができますが、こころの成長変化は、数値化はむずかしいです。この冒険教育理論の考え方は、こころが成長していく過程を上手にあわしていますので、分かりやすい図となっています。子どもたちは、キャンプ体験を通して、(1) 自分自身との関係 (2) 仲間、他者とのコミュニケーション (3) 自然や社会・環境との関係が少しずつ少しずつ、拡大、改善し、こころも大きくなっていきます。子どもは体験を通して自ら成長していきます。

6. 野外教育の特性

キャンプや野外教育の教育としての特性について、少し解説したいと思います。さまざまなキャンプ活動を野外教育や野外学習としてとらえた場合、教室外の野外や自然環境という場をどう考え、そこで、何をどう教えるのか、という教育目標や内容、教育方法の問題、そして、子どもたちは体験を通して何を学習しているのかといった問題が野外教育には常につきまっています。キャンプを野外教育として見た場合、子どもたちはキャンプを通して何を学習しているのでしょうか？私は研究の中で、教室の中での教育と教室の外での教育の比較をしてみました。キャンプなどの野外教育を学校での教室での教育と比較すると、構造論的に教室の「内と外」という素朴な

構造モデルとして考えることが可能です。アメリカでキャンプ教育を野外教育へと発展させた、L.B. シャープという有名な方がいます。彼の有名なよく知られたことばに次のようなことば (図2) があります・・・教室の中でより良く教えることができることは教室内で、学校外で直接体験を通してより良く学べることは、学校の外 (教室外) で学ばれるべきである。

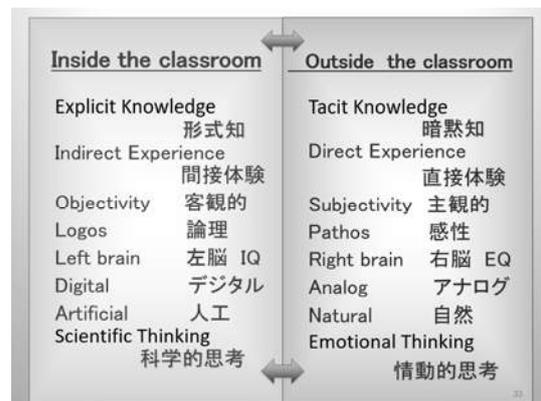


図3 教室の中、教室の外

この図 (図3) は、L.B. シャープが言っている、教科書で容易に教えることができることと、教科書ではなかなか教えることがむずかしいこととの関係です。たとえば、読み書きそろばん (3Rs) とされるような教科学習は教室内でより教えやすいですが、体験を通してはじめてわかるもの、たとえば、川あそびの気持ちよさとか、山登りの達成感、友だちとの関係づくり、雪山でのスキーや川での泳ぎ方などは教科書だけでは教えることができません。私たちの扱うキャンプは、主に、この教室の外での教育となります。

少しむずかしい話になりますが、L.B. シャープが言う教室の内と外で扱う学習内容の関係は、実は、哲学分野の「形式知と暗黙知」あるいは、「間接体験と直接体験」「客観的知と主観的知」「科学的思考と情動的思考」などの知の二項関係でとらえることができます。「左脳と右脳」「IQ とEQ」「デジタルとアナログ」との関係とも同じ関係です。

実は、キャンプでよく行う「ふりかえり」という行為は、キャンプで体験した極めて個人的で主観的な思い (図の右側の内容) をふりかえりという行為を経て、いわゆる学習されたものへと変換

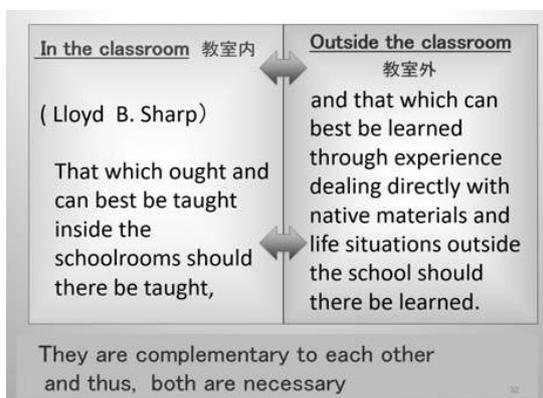


図2 L.B. シャープの言葉

する行為（右側の図から左側の世界への橋渡しをすること）で、言葉や共有された知識として学べるものに変換していることになります。

私は、教育学者デューイが言う、第一次経験と第二次経験の関係は、この図の右側のきわめて個人的に体験されたこと（第一次経験）を自分自身の内省や仲間とのふりかえりを通して、左側の図の他の人と共有できる体験や知に変換する（第二次経験）ことを指しているのだろうと解釈しています。私は、どちらの方が正しいか間違っているか、どちらのほうが、教育として良いか悪いかといった関係を言っているのではありません。どちらも大事ですし、バランスが大切です。キャンプや野外教育は、体験を学びに発展させることができるきわめてバランスのとれた良い教育であるということが言いたいのです。

7. キャンプ体験を通じた文化の継承について

私のキャンプの原点は学生時代にありますが、私には、もう一つ大きな影響を受けたことがありました。大学院を修了し、明治大学に職を得た後、三十歳代半ばで、1年間のアメリカでの在外研究（Visiting Researcher）の機会が得られました。1985年からの1年間でした。この1年間のできごとは、初期にキャンプを学んだ時と同じか、あるいはそれ以上に、現在の私の考え方に決定的に大きな影響を及ぼしました。

アメリカ北イリノイ大学大学院には、野外教育専門コースがあり、野外教育で著名なドナルド・R. ハンマーマン先生や若手のクリフ・ナップ先生たちが教鞭を執っておられ、私も直接指導を受

けました。この時に、ハンマーマン先生から教えていただいたことで、今でも強く印象に残っていることがあります。

ハンマーマン先生は、野外教育を行うことの意義の一つとして、「野外での直接体験を通して、ことばや概念の本当の意味が身につくことである」と言われていたことです。先生がこの点を強調されていたことは、教育哲学者でもあるジョン・デューイのプラグマチズムの影響もあると思われませんが、最近、とくに先生の言われていた「本当のことばの意味がわかること、身につくこと」

（図4）が野外教育の強みであり、かつ大事な視点であるということが実感として、私にもよくわかるようになってきました。

アメリカでの1年間で、文化というものは、共有体験や、生活体験の中から形作られる価値観を基盤に、じっくりと時間をかけて作られていくということを強く実感しました。日本人が誰もいないところで、たった一人で1年間生活したおかげで、私個人という人間がいかに日本の文化を受け継いだ存在であるかということをとっても強く感じた1年間でした。

キャンプでテントに寝たことのある子どもにとって「テント」ということばや文字の意味は、Googleを使って調べた「キャンプで泊まるための道具」という以上の、たくさんの意味や体験、イメージを含んだことばとなっているはずです。悪天の中、同じテントで共に暮らした仲間同士であれば、「テント」ということばには、更に多様な意味付けがなされていることでしょう。

ある言葉が含んでいる意味は、そのことばを受ける側の体験コードを介して理解されていきますので、同じ体験が共有されていますと、言葉も意味を含んで相手に伝わっていきます。

最近私は、この「共有体験を通して、ことばの本当の意味がわかる、体験を通して身につけたことばに意味が生じる」という点にキャンプのもう一つの大事で大きな意義があると感じるようになってきました。かつてハンマーマン先生が言っていたことはこれなんだと確信しています。インターネットが開発された1985年以降に生まれた世代は、デジタルネイティブと呼ばれるそうです。デジタルネイティブ世代の子どもたちにとっ

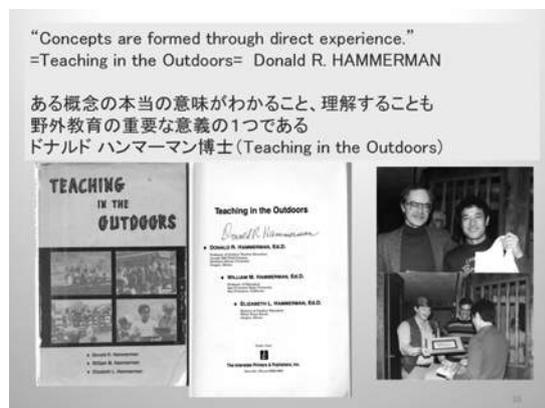


図4 野外教育の重要な意義

て「体験すること」の意味は、ますます大きくなっていくものと思われます。インターネット上（外部記憶装置）の用語と体験を通して身につけた用語には大きな違いがあります。



体験と結びつく言葉の意味

この写真に写っているのは、私の孫ですが、この夏、私が生まれ育った実家の前の川で、釣りの仕方を教えてきました。彼は、私よりも上手にスマホを自由自在に使いこなしていますが、この川で彼自身の身体の中に記憶させた「釣り」や「川あそび」は、Googleの検索情報からは見つけれない、自分だけの宝物として彼の身体や脳の中に残っているのだと思います。私は、世界がグローバル化している今、子どもたちにキャンプを提供する事の大事な意味がこの点にもあると思っています。このようなローカルで文化的な体験を子どもたちに伝えていくことがいまとでも大事ではないかと最近特に強く感じています。

青少年キャンプには、生きる力を育んだり、仲間とのコミュニケーション能力を向上させたり、自然観を育成するなど、時代を超えて通底する3つの大きなねらいと教育的な効果があります。私は、最近では、これに加えて、文化的なことばの意味が共有されること、つまり「日本的な文化を伝えること」、「その国の文化をキャンプを通じて伝えること」をキャンプ4番目のねらいとしても良いのではないかと考えるようになりました。

私たち大人がキャンプで使っている何気ないことばの中には、日本人の自然の見方や考え方、自然と関わる暮らしの中から紡ぎ出されてきたことばが豊富にあります。子どもたちは、自然の中でキャンプをするという共有体験を通して、私たち大人が先人から受け継いできた日本的な自然観やものの見方考え方、自然との接し方を知らず知ら

ずのうちに学び、身につけ、受け継いでいるのではないか、それが、大きな目で見ると日本文化の伝承に繋がっているのではないか、最近特にそう思うようになってきています。

戦後70年、ますますグローバル化する国際社会の中で、今の日本の子どもたちが成長し、海外の同世代の人たちと交流し意見交換するときに、しっかりと日本のもの見方考え方を基盤にし、自分の国を誇り、自信を持って意見が言えるような、そんな日本人がキャンプを通してたくさん育って欲しいと願っています。

いつの時代にも大事なことは、「良質な体験の場と自然環境と信頼できる指導者」がいる場を青少年のためにいつも用意しておくことです。そのために最適なのが組織キャンプなのです。学校教育の補完としてばかりでなく青少年が成長していく上での必須事項として、また、各国の文化の継承としてもキャンプ体験がとても重要だと私は考えています。これからも皆さんと手を携えてキャンプ振興に励んで行きましょう。

みなさま、ご静聴、ありがとうございました。

本稿は2016年10月29日から開催された、第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会での基調講演（10月31日）「Organized Camping in Japan」の内容です。掲載にあたり、発表者の承諾を得て一部加筆修正しています。

特別寄稿

組織キャンプの先駆者小西孝彦が残したもの

石田易司（桃山学院大学教授）

Yasunori ISHIDA

キーワード

組織キャンプ、アサヒキャンプ、障がい児キャンプ、フレッシュエアテント、創造と協同

論文の概要

戦後の日本のキャンプのリーダーの一人である小西孝彦の業績を、彼の著作、知人の証言、追悼集「小西孝彦さんに学ぶ」などから考える。

神戸 YMCA のキャンプカウンセラー、アサヒキャンプのキャンプ長、オーナーなど、30年近く組織キャンプの世界に関わってきた小西は、日本で最初の市民に開かれた組織キャンプ場の創設、日本で最初のスペシャルニーズキャンプの実施、家型やフレッシュエア型のテントの日本での製作、組織キャンプに関する著作など、日本型の組織キャンプの創造に大きな足跡を残した。

その目指したものは、キャンプに参加する子どもたちだけでなく、キャンプカウンセラーとして活動した学生ボランティアなど、広く青少年の育成を目指す無償のムーブメントであり、「Camping for All」という考え方に根差した、誰でもがキャンプができるという、一人ひとりの人権を尊重する精神にあった。

目次

1. 小西孝彦が残したもの
 - ①アサヒ型テント、フレッシュエア型テント
 - ②「キャンプカウンセリング」「組織キャンプ」
 - ③物語
 - ④障がい児者キャンプ
2. 小西孝彦の略歴

3. 小西が創ったアサヒキャンプ
4. まとめに変えて～小西の言葉
 - ①キャンプは善意のムーブメント
 - ②組織キャンプの形
 - ③キャンプのプログラムとは
 - ④キャンピング フォー オール
 - ⑤キャンプの安全
 - ⑥キャンプの食事はスローフード
 - ⑦キャンプカウンセラーのリーダーシップ
 - ⑧キャンプ長の仕事は未来を見ること

1. 小西孝彦が残したもの

2015年12月、小西孝彦が死んだ。その人を知っている人は、キャンプをしている人の中でもごく限られた少数の人だろう。彼がアサヒキャンプのキャンプ長として直接キャンプの世界に関わったのは1953年から63年のわずか10年でしかなかった。しかも、アサヒキャンプという狭い世界の中でのことでしかない。しかし、この短い間に、ともにキャンプをした人達の心には、大きな印象を残した人だった。

また、一緒にキャンプをしたことのない人でも、そして、小西の名前は知らなくても、たとえば、少年時代ボーイスカウトの活動に参加した人や、学校キャンプに参加した人の記憶に残っているはずの、カーキ色の帆布を使った家形テントや、クラスの男子や女子がそれぞれ一つのテント

で眠れる大きなフレッシュエア型テントを初めて日本に導入した人が小西孝彦である。

私が初めてキャンプの世界に飛び込んだ1960年代、キャンプカウンセラーとして勉強しようとしたとき、参考になる本を探してその少なさに多くの人が戸惑っていただろう。1967年にベースボールマガジン社からミッチェルとクロフォードが書き、兼松保一氏が訳した「キャンプカウンセリング」という本が出版され、当時のキャンプリダーにはまさにバイブルのような存在になるのだが、小西孝彦はその前年、66年に「キャンプカウンセリング」という本を、67年には「組織キャンプ」という本を出版している（いずれも朝日新聞大阪厚生文化事業団）。商業出版されたわけではないので、それを見た人は限られているだろうが、持っている人はまさに宝物のように大切にしてきたはずだ。私の手元にも先輩から譲られた、ぼろぼろの表紙で、中には線や書き込みがいっぱいされた、汚いその本があり、今も私の心の中で大切にされている。

また、その後、キャンプや障がい者福祉などの研修会や講演会で小西が語った話も、形ではないけれど、多くの人の心に深く残っている。冷めてしまったカレーライスが、とてもおいしかったという日本で最初の障がい児キャンプのエピソードや、先に書いた家形テントを作った時の話だ。

この障がい児キャンプは、今でも各地で、様々な団体の手で実施されている。竹内靖子の調査では、大阪市内の特別支援学校、社会福祉施設、NPO／ボランティア団体などの手で、2014年夏には60団体も実施している（※1）。この障がい者キャンプの最初の仕掛け人の一人が小西孝彦だった。

※1 [知的発達障がい児・者キャンプの意義と可能性に関する実証的研究] [科研費]

戦後の関西で、まさに先駆的なキャンプの世界で、こうした様々な事績を作ったのが小西孝彦なのである。

ではその一つひとつのことをもう少し深く振り返ってみよう。

①アサヒ型テント、フレッシュエア型テント

1953年、小西孝彦がその創設に関わったアサヒキャンプでは、当時、その道具のほとんどを米軍や日本軍から払い下げられたキャンプ用具を使用していた。道具のほとんどが軍隊使用のものであったので、色はほとんどが目立たないカーキ色一色であった。

私が初めてアサヒキャンプに参加したアサヒ志摩キャンプセンターの倉庫の奥から、昆虫採集で使うような細いガラス容器がたくさん出てきた。英語の読める仲間が説明を読むと、死体の脇に挟んで、個人が識別できるように名前などを入れておく容器だった。

こんなふうに、テント、毛布、飯ごう、なべなど、いろんなものが軍隊の払い下げ品だった。

下のパンフレットは1953年、アサヒキャンプが初めて大阪府と奈良県の県境、生駒山上で開設された時のパンフレットだが、見てわかる通り、テントは三角テントである。移動に大切な軽さ、冬季使用に必要な暖房効率、風対応などを考えると、この三角テントは合理的である。

しかし、夏季だけ使用する、また定住型のキャンプでは、この三角テントが不自由で使いにくいのは当然である。暑いし、立って生活することができない。低い屋根で高さのない部分は物置にもならない。

そんな1953年、ヘミングウェイ原作、グレゴリー・ペック主演の一本の映画が世界中で大ヒットした。「キリマンジャロの雪」である。アフリカのサバンナを探検する小説家の話である。けがをして、ベースキャンプから動けなくなって救援を待つ、そのテント生活が冒頭に出てくる。映画を見て、小西はそのテントに釘付けになった。それまで日本では見たこともない「ウォール」のある家型のテントだ。ビデオのない時代、小西はそ



の映画の冒頭の場面だけのために3回も4回も見て、図面を描き、サイズを測った。これが北口山スキー研究所（※2）の手で商品化される。



※2 北口山スキー研究所 大阪市北区にあった登山やスキーの専門店。北口礼吉氏が創設し、2000年はじめに、高齢のため閉鎖した。私もこの店でさまざまなキャンプ用品を購入していたが、リュックも、登山靴も糸が古くなってきたら、無料で修理してくれた。子どもの移動キャンプで一人用テントが必要だといったら、一緒に設計図を引いて、いくつかの試作品を作ってくれた。

しかし、一生ものを売りにしていたため、高齢者は一度買ったものは2度買うことはなく、若い人が登山やスキーをしなくなって、また、店主の高齢もあって、店は閉鎖された。北口礼吉氏は2004年、日本キャンプ協会キャンピングアワードを受賞されている。

そして、アサヒキャンプだけでなく、ボーイスカウトなどでも定住型のキャンプで使用するテントのモデルとして日本中に普及するのである。

また、小西は1956年、朝日新聞厚生文化事業団創設50周年事業の一環で、アサヒキャンプカウンセラー卒業生で大阪府野外活動協会職員の吉水泰彦と48日間、アメリカのキャンプの視察に出かける。その結果が次の項に出てくる「組織キャンプ」としてまとめられるのだが、その中に印象的な項目がある。

ニューヨーク・ヘラルド・トリビューンという新聞社が、スラムの子どもたちに新鮮な自然の空気をと、「フレッシュエアキャンプ」という社会事業的な視点を持ったキャンプを実施している。その時に使用しているテントが、日本での学校

キャンプなどに向いていると、日本に持ち込むのである。これも北口山スキー研究所の手で商品化され、各地に広がっていくのだ。1クラスの男女およそ20人が一緒に生活できる広さ。テント台があるので、雨や湿気に強い。ウォールがあるので、立って生活できる。1シーズン中、建てたままで管理できる丈夫さなどが、このテントの特色だ。学校キャンプ中心に普及してきた日本のキャンプではまさにヒット商品だろう。

②「キャンプカウンセリング」「組織キャンプ」

1966年、小西は「キャンプカウンセリング」という本を書く。63年、小西は朝日新聞内の厚生文化事業団から印刷局に異動になるのだが、キャンプの現場を離れたこと、勤務時間が深夜に及ぶことなどで時間ができたことなどが理由で、これまで活動してきたことをまとめようとする。キャンプディレクター10年の活動のまとめである。



神戸YMCAで、関西学院大学社会学部で今井鎮雄から学んだグループワークの理論と、アサヒキャンプでの実践を整理した小冊子である。

その時、アサヒキャンプでキャンプ長をしていた佐野信三がその出版に大きな役割を果たしたことが、前書きに出てくるが、彼も同志社大学で大塚達雄からグループワークを学んだのだから、内容はもしかしたら二人の合作といえるのかもしれない。

アサヒキャンプでは、それまで日本のキャンプをリードしていたボーイスカウトやYMCAが使用していたキャンプリーダーという用語を使用せず、キャンプカウンセラーといていたが、まさにリーダーではなくカウンセラーだと、グループワーク、カウンセリングの理論をキャンプに応用

した著作だった。

また、翌年、小西は「組織キャンプ」を出版する。これは吉水泰彦との48日間のアメリカ珍(?)道中日記なのだが、自身が実践してきたアサヒキャンプと最新のアメリカのキャンプ事情を整理した本である。まさに小西が理想とする組織キャンプのあり方を論じている。



この二つの本の意義は、先にも書いた兼松訳の「キャンプカウンセリング」に先行する日本で最初の組織キャンプを論じた本であること。また、それまでアメリカのキャンプ理論でしかなかったキャンプ本を、日本の実践と交わらせた、日本のキャンプの本だということ。また、そのことによって、体験でしか語れなかったキャンプをグループワークやカウンセリングという援助技術論で理論化したことである。

③物語

小西孝彦は文章を書くのが得意だった。小西の文章は理論的でもあったが、人に理解してもらおうと思ったとき、具体的な事実の上に物語で色づけて、誰にとっても分かりやすい、象徴的なストーリーを作り上げることが、まさに名人芸のようだった。

下の冊子は、大阪府キャンプ協会が主催し、2日間に渡って小西自身のキャンプ人生を語って



もらったものをテープに起こし、整理したブックレットだが、そうした物語であふれている。

小西自身も何度も語っているので、形式的な物語になりきっているのだが、日本で最初の障がい児キャンプを象徴する「冷めたカレーライス」の話はそのことを雄弁に語っている。

歩くことのできない脳性まひの少年が1週間かかって、テントサイトから坂道の上にある食堂へ自力で行くのを他のメンバーがじっと待っていた結果、おいしいカレーライスがさめきってしまったというのである。しかし小西は、そのカレーライスがこれまで食べた中で一番おいしいカレーライスだったというのである。

下の写真は、小西が最初にキャンプ長をしたアサヒ志摩キャンプセンターの航空写真だが、新婚旅行の時に新妻をほったらかしにして、ホテルの窓から見えたこの島を、モーターボートを借り切って、何周もして、これこそ私たちのキャンプ場だと決めたというのだ。私たちのキャンプ場が誕生した、まさに秘話なのだが、奥様はそんなことはなかったと、軽く否定されていた。



社会福祉界では「岡村理論」を打ち立てた、伝説の人岡村重夫氏がこの島に来られた時、目隠しをして障害物を超えていくゲームをして、岡村氏が障害物を記憶した後、目隠しをしてそれを乗り越えていくとき、全部の障害物を取り除いてしまい、何も無い平地をまるで障害物があるがごとく、足を上げ、回り道をして歩いて、それをみんなが大笑いしたのを知って、激怒した話など、誰が聞いても、いつ聞いても大笑いものだった。

物語をもう一つ。アサヒキャンプではキャンプ場の地元の人を大切にしてきた。必要があれば地域の人を雇用し、地域の商店からものを購入する。

アサヒ志摩キャンプセンターでは野菜は鶴方にある森口商店から買っていた。注文の品をファクスで送り、毎日午後2時に賢島港に船で取りに行く。お盆も日曜日も関係なく、7月8月の2か月間、毎日、ご夫婦で軽トラックを運転して届けてもらう。

その森口商店の家族がそろって、絶対に食中毒を出さないように、食品のチェックは言うまでもなく、毎日梅干を食べて、夏の間絶対に病気しないように、細心の注意をしてくれているというのである。

この話をしながら、小西は、だから私たちも細心の注意で食事を作り、キャンパーに提供しなければならないと私たちに説くのである。

④障がい児者キャンプ

先のカレーライスの話で出てきた、私たちキャンプ仲間間で有名な話は、日本で最初の障がい児キャンプの成立のことだ。整形外科医水野正太郎さんと神戸YMCA主事の今井鎮雄さんの間でまとまった障がい児の1週間のキャンプを、小西が橋渡しをして、朝日新聞がスポンサーになり、神戸YMCA余島キャンプ場で開かれることになった。翌年には当時の大スター森繁久弥がキャンプ中にヨットで訪れるというハプニングがあったし、カレーライスの主人公西村雄三さんが、のちに足の指の間に絵筆を挟んで描く画家になって、障がい者の自立の象徴のような存在になり、余島キャンプのメインホールに100号のバラの絵を寄贈することになるなど、話題が尽きないこのキャンプの仕掛け人が小西だったのである。次の写真はその時のもので、2015年12月の小西の死の数日前に、当時のキャンプカウンセラーとキャンパーが、60年後に、あれはいったい何だったのかという回顧をする講演会のチラシに使われた(※3)。

※3 2015年11月29日、はんしん自立の家「1953年肢体不自由児キャンプから学ぶ「人間の尊厳とは何か」神戸YMCA主催。

私もその講演会に参加したが、「この時私は障がい児から一人の少年になった」と語った参加

者・片岡實は、大人になって障がい者福祉の仕事に携わる。そのパートナーに小西を選び、彼が理事長を務めるひょうご障害福祉事業協会の、小西は理事や監事をずっと続けることになる。



2016年3月に開かれた「小西孝彦さんに学ぶ会」(主催・大阪府キャンプ協会ほか)の中で片岡さんは次のように思い出を語っている。

1953年夏、神戸YMCAと朝日新聞厚生文化事業団が小豆島(余島)で日本で初めて「小児まひの子どものキャンプ」を開き、私は9歳で参加したキャンパーの1期生で、小西孝彦さんは朝日新聞社のスタッフとして参加されていました。キャンプは子どもたちに、障がい児ではなく、一人の子どもとして、自信と勇気を持たせてくださいました。

2. 小西孝彦の略歴

こうしたキャンプ史上華々しい活躍をした小西は、いったいどんな経歴で、キャンプに触れ、日本のキャンプに次から次へと新しい風を吹かせることができたのだろうか。

記録にない略歴をご子息、朗さんの確認で作成してみた。

1931年 西宮市の高級住宅街仁川地区で、小西作太郎氏の次男として誕生。(作太郎氏は朝日新聞元常務で、高校野球の生みの親として有名。第1回大会の始球式をする)

1949年 関西学院大学社会学部入学、社会福祉専攻。神戸YMCAのキャンプボランティアとして活躍。今井鎮雄氏にグループワークを習う。元関西アメリカンフットボール部監督として有名な武田建氏と同級生。ソーシャルワークの

- 研究者としても有名な彼を小西は「ケンちゃん」と呼んでいた。
- 1953年 同大学を卒業と同時に朝日新聞社入社。厚生文化事業団配属。アサヒ生駒山キャンプ場の創設に関わる。
アメリカ映画「キリマンジャロの雪」を見て、家型テントの設計。日本のキャンプの普及に貢献。
- 1957年 アサヒ生駒山キャンプ場キャンプ長。
新婚旅行で三重県英虞湾内の多徳島に出会い、この島をキャンプ場にと決意。
- 1959～63 アサヒ志摩キャンプセンターキャンプ長。
多くのキャンプカウンセラーを育てる。
- 1963年 朝日新聞大阪本社印刷局へ異動
- 1966年 「キャンプカウンセラー」、発刊
- 1967年 吉水泰彦さんと48日間のアメリカキャンプ視察。日本で最初の公立キャンプ場、大阪府立総合青少年野外活動センターの設立に貢献。
「組織キャンプ」発刊
- 1976年 朝日新聞100周年記念事業として、滋賀県朽木村（現高島市）に「朝日の森」設立を提案、担当。アサヒキャンプ朽木村設立に協力
- 1985年～88年 朝日新聞大阪厚生文化事業団事務局長。
この間、日本キャンプ協会理事、関西で組織キャンプの理論研究をする「組織キャンプ研究会」メンバー、大阪府キャンプ協会設立にかかわる。宝塚市社会教育委員など歴任。
- 2015年12月 永眠
- 以上が小西のキャンプに関わる略歴である。

3. 小西が創ったアサヒキャンプ

小西のキャンプの活躍の場の中心はアサヒキャンプだった。また、そこにこだわって、人生を過ごしてきたことも間違いのない事実だと思う。小西個人の目に見える実績は第1章で示したが、それらの集大成ともいえるアサヒキャンプは何を残し、その小西の影響は何だったのだろうか。



小西のアサヒキャンプへのこだわりは大きく、二つあると思う。

一つは、小西の後任のアサヒ生駒山キャンプセンターのキャンプ長を務めた戸室常一が、小西に「キャンプ長として一番大切なことは」と聞いたとき、間髪を入れず、「キャンプカウンセラーを育てること」(前掲「小西孝彦さんに学ぶ」)といったように、人材の育成に心血を注いだことだろう。

アメリカ大陸への視察旅行を共にした吉水泰彦をはじめ、戸室常一、佐野信三、谷川俊一、島中彬、石田易司、中村茂高など、小西の薫陶を受けて大阪府キャンプ協会の理事を務めたメンバーも7人に上るし、岡本民夫、東山紘久、小田兼三、日高正宏など、教育、心理、福祉関係で大学教授を務めたメンバーも多い。福祉施設や青少年施設、学校などの現場で働いたキャンプカウンセラー卒業生は数知れない。

上の冊子はそうした小西の作ったアサヒキャンプが60年を迎えたときの記念誌である。

また、小西がアサヒキャンプに気持ちを込めたもう一つの特徴が、日本で最初の障がい児キャンプをはじめ、日本で最初の数々のスペシャルニーズキャンプの実施である。

私も小西に言われたけれど、新聞社がキャンプをしている意味は記事になるキャンプを実施することにある、と。

中島豊(※4)が日本キャンプ協会主催の第1回日本キャンプミーティングで、戦後の日本の組織キャンプの歴史の中のスペシャルニーズキャンプの初出を発表した時、そのほとんどがアサヒキャンプであったことに大きな驚きを禁じ得なかった。

※4 1997年5月、国立オリンピック青少年センターで開催。「日本における量育キャンプの歴史」中島豊〔弘前学院短期大学〕

日本で最初の市民に開放された組織キャンプ「アサヒ生駒山キャンプセンター」の開所、文部省主催のキャンプ指導者養成講習会（※5）をはじめ、下記の記録のように、様々な対象のキャンプがアサヒキャンプで実施されている。

※5 1955年、文部省主催「全日本教育キャンプ指導員中央講習会（西日本会場）」（「先駆」朝日新聞大阪厚生文化事業団55年の歩み1984年5月）

アサヒキャンプの挑戦

- | | |
|----------------------|------------------------|
| • 1953 肢体不自由児キャンプ | • 1981 不登校児キャンプ |
| • 1953 生活保護児キャンプ | • 1983 在日ベトナム難民子どもキャンプ |
| • 1958 知的障害児キャンプ | • 1983 中国帰国者キャンプ |
| • 1960 非行少年キャンプ | • 1985 ハンセン病療養所キャンプ |
| • 1961 ぜんそく児キャンプ | • 1992 学習障害児キャンプ |
| • 1971 公害地区の子どものキャンプ | • 1993 認知症高齢者キャンプ |
| • 1972 サリドマイド児キャンプ | • 1993 精神障害者キャンプ |
| • 1978 自閉症児キャンプ | |

上の表は中島の表にアサヒキャンプの年報「創造と協同」を元に、石田が付け加えたものである。このほかにも、盲児キャンプ、中卒の勤労青少年キャンプ、保育学生キャンプ、障がい児と健常児の統合キャンプなども行われている。

ここでも小西は物語を作る。

最初の生活保護家庭児キャンプの時、「キャンプ長の仕事は彼らにご飯を腹いっぱい食わせること」と。米が配給制の時代、一般のキャンプではみんな自分の食べる米を持参するのが当たり前だった。それができない子どものために、麓の農家を一軒一軒回って、米を分けてもらえるよう交渉することが、キャンプ長の仕事だった。そして、子どもたちがお代わりをするときの満足げな表情を見て、自分のしたことが報われたと言い切る。

アサヒキャンプカウンセラー6期生の岡本民夫は盲児たちのキャンプをしたとき、自分の好きな夕日のきれいな場所へ子どもたちを連れて行って、「きれいな夕日」を見せた。そのとき、彼らの目が見えないことに気付く。自分の失敗に気付かされ、落ち込みそうになった時に、全盲の少年

が「きれい」と同調してくれたことで救われる。全盲といっても光は感じる彼は、オレンジ色の世界がちゃんと「見えていた」のだ。

そんな話を通じて、小西はアサヒキャンプが何をするとところなのか、カウンセラーの仕事は何なのかを私たちに語り続けた。

カウンセラーの育成とスペシャルニーズキャンプへのトライが小西のアサヒキャンプにおける二つの大きな主張だったと言えるだろう。

こうした小西の、青少年を育てる、あるいは障がいがあるとうと病気があろうと、すべての人にキャンプを提供するという思想は、どこから生まれてきたのだろうか。

学生時代からの同級生で、ともに関西の組織キャンプの発展に尽くしてきた井上都史弘さんによれば、元神戸YMCA総主事の今井鎮雄氏、頌栄学院大学初代学長で女子教育に携わった横田栄三郎氏、あるいは育った関西学院などのキリスト教精神に大きな影響を受けていた。

アサヒキャンプのその志は、小西の後を継いだ戸室、佐野両キャンプ長の手で間違いなく小西の目指したものが実践され続けてきた。

4. まとめに変えて～小西の言葉

最後に、小西の著述や語った言葉の中から、印象に残る言葉を挙げて、小西のキャンプへの思いをまとめておこう。

「小西孝彦さんに学ぶ」の中に、アサヒキャンプカウンセラー11期の島中彬さんが様々な小西の文章からまとめたものをさらに整理し、私自身が小西から直接聞いた言葉を加えてみた。

①キャンプは善意のムーブメント

伝統には永遠の生命を持った部分と、時代とともに変わる部分がある。当初の目的ややり方のすべてを、今のキャンプは受け入れることはできない。永遠の伝統は守り、その上にその時に社会が要求しているものを加えてこそ、今の組織キャンプであると言えます。

キャンプの変わらない伝統とは、自然の中で集団の生活をすることによって、青少年を心身ともに健康に育てようとする善意の運動（ムーブメント）であり、何らかの教育的意図を持つ

ていることです。

②組織キャンプの形

アサヒキャンプのモットーは「Creativity & Cooperation」です。「創造と協同」と言っています。キャンプというのは多くの人たちが寄り集まって、新しいものを生み出していく力をつけるというのが私たちの最初のキャンプでした。

テントも何もないところで生活するためにはお互いに知恵を出し合い、力を合わせないと何もできない。知恵を出し合い、協力することで楽しいキャンプができる、それが組織キャンプです。

③キャンプのプログラムとは

キャンプのプログラム技術は、キャンプスタッフの目に見える技術として強調されてきました。だから従来のキャンプの本は「プログラム技術の本」でした。キャンプの中でプログラムが重要であることは当然ですが、プログラムはキャンプの目的に達するための手段であり、過程です。

いかにキャンプのプログラム活動の種類が豊富で、内容があって楽しいものでも、そのキャンプの目的を見失ってはなりません。

また反対にキャンプの目的により早く、より高く近づくためには、キャンプのプログラム活動こそ大切だと言えます。

④キャンピング フォー オール

私は学生時代のYMCA、さらにアサヒキャンプで通算30年間キャンプをしました。その中心課題を一つだけ挙げるとしたら、どんな子どもでもキャンプができるようにすることでした。

私たちの若い時代は子どもの障がいを隠すのが普通でしたから、障がい児をキャンプに連れ出すというのは大変なことでした。

そんな子どもたちがキャンプに参加できるようにするための30年だったと思います。その間、約30万人の子どもたちが私たちのキャンプに参加しましたが、そのうちの1割、3万人が障がいを持っていたことが、私の誇りです。

⑤キャンプの安全

水泳プログラムの遊泳可能なゾーンは、毎日

変化します。水泳のゾーンを決めるのは、その日、その時のスイミングリーダーで自分の責任で安全に泳がせることのできる範囲を決めます。その日のスタッフの人数、遊泳者の人数と能力、潮の干満、気温や天候によって、遊泳ゾーンは毎日変わるのが当たり前です。

アーチェリーでは弓の弦をカウンセラーがもっていきます。

このように、「安全か」という質問に「イエス」という関所を越さないと、キャンプの活動は成り立たないのです。

窮屈で、参加者のニーズを狭めるようですが、実際にやってみると、全く逆で、安全に楽しくキャンプができるように工夫し、知恵を絞っているうちに、プログラムの幅が広がり、活気が生まれてくるのです。

⑥キャンプの食事はスローフード

食生活をただと、子どもたちは生き生きしてきます。

キャンパーは自然の中でプログラムにできるだけたくさんの時間が取れるよう、食事を作るのに時間がかからないよう、油を使った料理を多くします。しかし、これからのキャンプは切り干し大根を朝から水につけて、夕食に油揚げと一緒に炊くような、時間と手間をかける食事が大切です。

時間をかけて、心を込めて食事を作る、これがキャンプの食事の基本になるべきです。

⑦キャンプカウンセラーのリーダーシップ

生まれながらにしてリーダーシップを持っている人はいません。キャンプカウンセラーとは、リーダーシップを持ち、言葉で表せないような魅力のある人で、人付き合いがよく、気が利いて、おしゃべりが上手な人と思っている人がいるでしょうが、本当に有能なキャンプカウンセラーは万事控えめな人柄の人が多いものです。リーダーシップの本質は、他に影響を与えるその人の内面の問題と解釈するべきです。

⑧キャンプ長の仕事は未来を見ること

グループカウンセラーは今、グループの子どもたちを見、責任を持っています。プログラムディレクターは、今日の、あるいはこの期間のキャンプ全体を見て、判断をし、責任を負いま

す。

キャンプ長は、今のキャンプのことはカウンセラーやプログラムディレクターに委ね、来年の、あるいはもっと先のキャンプを見ていなければなりません。

こうした文章の中から、私たちがキャンプの指導者として活動するために、忘れてはならない事をいろいろ見出すことができる。

戦後の日本のキャンプの先駆者、小西孝彦の死に出会って、今一度、日本の組織キャンプの原点を確かめてみたい。

参考文献、引用文献

- 朝日新聞大阪厚生文化事業団 「創造と協同」
1954～1988
- 小西孝彦 「キャンプカウンセリング」 朝日新聞大阪厚生文化事業団 1966
- 小西孝彦 「組織キャンプ」 朝日新聞大阪厚生文化事業団 1967
- 朝日新聞大阪厚生文化事業団 [先駆] 55年の歩み 1984
- 石田易司編 「小西孝彦のキャンプの世界」 大阪府キャンプ協会 1993
- 日本キャンプ協会 [第1回日本キャンプ会議抄録集] 1997
- 編集委員会編 「アサヒキャンプの60年」 アサヒキャンプ 2013
- 畠中彬・石田易司編 「小西孝彦さんに学ぶ」 大阪府キャンプ協会 2016

本稿は「桃山学院社会学論集 50 巻第 2 号 1～19 ページ」に掲載された原稿を、転載許可を頂き掲載しています。転載許可を頂きました関係者のみなさまにお礼申し上げます。

資料

公益社団法人 日本キャンプ協会「キャンプ研究」投稿規程

【投稿資格】

1. 投稿の執筆者は、筆頭および共同ともに、公益社団法人日本キャンプ協会（以下、「本会」という）の会員に限る。ただし、本会が執筆を依頼する場合は、この限りではない。

【投稿原稿】

2. 投稿原稿の条件は、以下の通りとする。
 - (1) 投稿原稿の内容は、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等を対象としたものであること。
 - (2) 投稿原稿は、原則として未発表ものに限る。ただし、以下のものについては、初出を明記することで未発表のものとする。
 - 1) 各種学会等において発表要旨集等に掲載されたもの。
 - 2) シンポジウム、研究集会、講演会等で資料等として発表されたもの。
 - 3) 国、自治体、業界、団体等からの委託による調査研究報告書等に収録されたもの。
 - 4) その他、本会が特に認めたもの。

【投稿原稿の区分】

3. 本誌の投稿原稿の区分は、研究論文、実践報告とする。
 - (1) 研究論文は、論文としての内容と体裁を整えており、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等において新たな知見をもたらすもの。
 - (2) 実践報告は、実際に行われたキャンプ等に関する報告であり、目的・対象・プログラム・指導体制等の概要を示し、新たな取り組みや課題等が十分に整理され、今後のキャンプにおいて有益な示唆を与えるもの。

【執筆要項】

4. 執筆に関する細則については、以下の通りとする。
 - (1) 体裁は、A4 版タテ用紙を使用し、必ずワードプロセッサ等で作成する。
 - (2) 原稿の長さは、本文・図表・写真・引用文献を含めて、研究論文は 12 頁以内（1 頁 1,600 字以内）、実践報告は 8 頁以内を原則とする。
 - (3) 文体は、「である」調とし、文字は、現代仮名遣いを基本とする。句読点は、「、」および「。」を用いる。
 - (4) 氏名と所属は、和文および英文の双方を明記する。表題は、原稿の内容を端的に示すもので、和文および英文の双方を明記する。
 - (5) 要旨（200 語以上 300 語以内）とキーワード（5 語以内）は、研究論文のみ、英文の記載をする。
 - (6) 引用文献は、本文最後に著者名のアルファベット順で一括して、一連番号をつけて記載する。本文の引用箇所には、該当する文献番号を肩字「例¹⁾」で示す。以下に、引用文献の記載例を示す。

(記載例)

雑誌の場合：著者名（発表年）題目、雑誌名、発行所、巻（号）、所在ページ

野村一郎（2010）キャンプの教育的効果、キャンプ研究、日本キャンプ協会、3(2)、101-112

書籍（単著）の場合：著者名（出版年）書名、発行所、所在ページ

野村次郎（2010）キャンプ教育、キャンプ教育研究社、30-40

書籍（共著等）の場合：著者名（出版年）章の題目、編者名、書名、発行所、所在ページ

野村三郎（2010）野外生活技術、野村一郎（編）、キャンプ総論、キャンプ教育研究社、25-28

【投稿原稿の採否】

5. 投稿原稿は、以下の掲載の採択を受けるものとする。

- (1) 研究論文の掲載の採択は、本会が委嘱する査読者 2 名が行う。審査の手続きは、以下の通りである。
 - 1) 研究論文の体裁に関して、本会が確認を行う。必要に応じて投稿者に修正を求める。
 - 2) 各査読者による審査結果は、次の 4 つのいずれかで報告され、投稿者あてに意見が付される。
 - A: そのまま掲載可能
 - B: 一部修正すれば掲載可能
 - C: 大幅に修正可能ならば掲載可能
 - D: 掲載不可
 - 3) 2 名の査読者の審査結果が、共に「D」の場合は、掲載不可とする。
 - 4) 上記 3) に当てはまらない場合のみ、2 名の査読者の審査結果が、「A」の段階に至るまで、投稿者とやりとりを行う。ただし、査読者が相応と考える修正や補足等が、同一箇所につき 3 回までに満たされなかった場合は不採択とする。
- (2) 実践報告の査読審査は行わない。ただし、不適切な表現や内容がある場合は、当該委員会が適宜助言し、投稿者が加筆修正を行った上で、掲載可能とする。
- (3) 修正を要する研究論文や実践報告は、60 日以内に再提出することとし、それを越える場合は取り下げたものとみなす。

【原稿の権利】

6. 本誌に掲載された研究論文や実践報告の著作権（「複製権」、「公衆通信権」、「翻訳権、翻案権」および「二次的著作物の利用権」を含む）は、本会に帰属するものとする。ただし、内容に関する責任は、当該研究論文や実践報告の著者が負うものとする。

【投稿方法】

7. 投稿に関する細則は、以下の通りとする。

- (1) 別紙の「キャンプ研究投稿連絡票」に必要事項を記入し、投稿原稿の計 3 部（オリジナル 1 部、コピー 2 部）と合わせて提出する。また、投稿原稿の電子ファイル（テキスト形式：各種メディア、電子メール等）も提出する。尚、投稿された原稿は、掲載の採否に関わらず、原則として返却しない。
- (2) 掲載料は、研究論文および実践報告ともに 5,000 円とする。

投稿原稿の送付先・問い合わせ先

〒151-0052

東京都渋谷区代々木神園町 3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内
公益社団法人日本キャンプ協会「キャンプ研究」編集事務局

電話 03-3469-0217 ファックス 03-3469-0504

E-mail ncaj@camping.or.jp

掲載料の振込口座

郵便振替口座 00190-3-34031

加入者名 公益社団法人日本キャンプ協会

*通信欄に「キャンプ研究掲載料等」と記載すること

資料◆「キャンプ研究」収録題目一覧

■第1巻(1997/12/20)

[原著論文] ●障害児における感覚統合野外キャンプ ●障害者野外活動におけるアダプテーションに関する一考察 ●青少年の組織キャンプ運営に対するキャンプカウンセラーの貢献度 ●キャンプにおける食中毒の法的責任と注意義務
[実践報告] ●野外体験学習指導者養成コース事例報告 ●小学生を対象としたアドベンチャーカヌーツアーの実践報告
●大阪府茨木市におけるリーダー育成キャンプの事例 ●アサヒキャンプ朽木村を中心とした徒歩移動型キャンプの実践報告 ●不登校の子ども達の暑い夏 ●自然体験活動の普及に関する新たな取り組み

■第2巻(1998/7/20)

[特別寄稿] ●全日本学生キャンプの草創
[原著論文] ●キャンプ運営における行政主催からボランティアクラブ主催への移行に関する問題点 ●グループを理解する
[実践報告] ●体験は未来を拓く力 ●トーチトワリング

■第3巻第1号(1999/6/30)

[原著論文] ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者のキャンプ ●2002年からの新学習指導要領にみる教科教育“水辺活動”実施に向けての研究 ●火の技術に関する一考察 ●喘息児キャンプにおける呼吸ゲームの実践

■第3巻第2号(1999/12/25)

[原著論文] ●子ども長期自然体験村と参加体験型学習システム ●思春期女子キャンパーの理解と援助
[実践報告] ●降雨が学生キャンパーの気分及び影響について ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●馬のいる生活を体験する「ウマキャンプ」 ●雑木林を学ぶの場に ●丹沢山中移動型キャンプ「かもしかキャンプ'99」の実践報告

■第4巻第1号(2000/7/26)

[実践報告] ●'99無人島キャンプ in 具志島 ●ファミリーキャンプにおける冒険教育の実践 ●無人島体験記 ●デイケアセンターぼちぼちハウスリフレッシュキャンプ ●彩光キャンプ'99 ●体育系学生の軽登山における水分摂取の効果 ●キャンプ対象の拡大～幼児キャンプの実践～ ●フィットネスキャンプを終えて ●痴呆性老人と自然を共有した「シニアキャンプ高知」の実践報告

■第4巻第2号(2001/2/28)

[実践報告] ●筑後川リバーサイドキャンプ in 原鶴 ●山田キャンプフェスティバル2000 ●知的障害を持つ子供たちとの長期キャンプ ●「不登校児」自然生活体験キャンプ in いけだ
[原著論文] ●「環境教育の学び」の評価方法に関する文献研究

■第5巻第1号(2001/6/30)

[実践報告] ●家族での乗馬体験プログラム ●幼児を対象にした野外教育の実践 ●人間関係形成の場としてのキャンプ～「未来世代 やさしさ発見!びわこキャンプ」の実践から～ ●第1回にいがた痴呆性老人キャンプ in 長岡 ●ニコニコキャンプ ●丹波自然塾-新しいコンセプトを持ったシルバーキャンプのこころみ-
[研究資料] ●野外活動における冒険プログラムの役割について

■第5巻第2号(2002/1/31)

[実践報告] ●アドベンチャー in 阿蘇キャンプ実践報告 ●森林環境に働きかけるキャンプ ●大沢野町アドベンチャーキャンプ ●不登校キャンプの実践報告 ●野外教育事業所ワンバク大学の幼児キャンプ ●“共有”活動としての幼児キャンプ ●知的障害児のための教育キャンプ ●埼玉 YMCA LD 児等キャンプ～つばさグループキャンプ～
[研究資料] ●キャンプ用環境家計簿の提案とその効果

■第6巻第1号(2002/11/11)

[実践報告] ●体験活動における遊び非行型不登校中学生への援助 ●ウマキャンプ-馬とのかかわりを通じた教育的アプローチの検討- ●人と人つなごう 手と手 心と心「つくしの家キャンプ in 鈴鹿峠自然の家」の実践から ●「からだほぐし」を通してのひとのかかわり 第1回 ハッピーウィリムン～ウィリアムズ音楽キャンプ～ ●母親と乳幼児のためのキャンププログラム ●エコキャンプ in 鷲敷キャンプ場 川内学童クラブ 鷲敷キャンプ場での試み

■第6巻第2号(2003/3/20)

[実践報告] ●海の自然体験活動としてのカヌープログラムの開発-港の中(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み- ●カッパ体験キャンプ ●ユニバーサルキャンプ
[研究資料] ●海洋性キャンプ参加者の海浜活動体験とプログラム満足度

■第7巻第1号(2003/9/30)

[実践報告] ●痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効用 ●親子いきいきリフレッシュキャンプ―事業中止から学ぶこと― ●登山プログラムにおけるスタッフのはたらきかけ―「大沢野町アドベンチャーキャンプ」の実践から―

[研究資料] ●キャンプ場のユニバーサルデザインについて ●キャンプ用環境家計簿の開発と効果

■第7巻第2号(2004/1/30)

[実践報告] ●阿蘇五岳制覇チャレンジキャンプ実践報告 ●海の体験活動としてのヨットプログラムの開発―湾内(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み― ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅰ)―白川小学校・神辺小学校・三重大学による3校合同キャンプの実践から― ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅱ)―白川小学校・三重大学による合同キャンプ in 石水溪の実践から―

[研究資料] ●長期キャンプが参加者に及ぼす効果とその維持期間―わんぱくこども宿(10泊11日)に着目して― ●キャンプ環境報告書の提案 ●海辺を活用した総合的学習における海のイメージの変容に関する研究―国立室戸少年自然の家主催事業「日本版 School Water Wise」に着目して― ●キャンプ実習における状態不安に関する研究―係の役割に着目して―

■第8巻第1号(2004/9/30)

[実践報告] ●シニアと子どもの交流キャンプ ●楽しく、安全な登山をめざした中高年のキャンプ講座 ●第5回痴呆性高齢者キャンプ in ぐんま

[研究資料] ●自然体験活動を志す動機について ●アメリカにおける野外教育指導者養成カリキュラム― Wilderness Education Association を事例として―

■第8巻第2号(2005/1/30)

[実践報告] ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●キャンプ経験が育成世代のサッカー選手の off the pitch 行動に及ぼす影響

[原著論文] ●長期キャンプ参加者の日常生活が自主性の変容に及ぼす影響

■第9巻第1号(2005/9/30)

[実践報告] ●おひさまクラブ親子キャンプ実施報告 ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅲ)―白川小学校・三重大学合同キャンプの実践から― ●自閉症協会東京都支部おやじの会ファミリーキャンプ ●中高年スキーツアーと自然観察ツアー ●緑と林と防災の教室

[研究資料] ●キャンプリーダーのキャンプ用環境家計簿に対する意識調査報告 ●冒険キャンプのふりかえり場面における参加者の心理状態がキャンプ効果に及ぼす影響

■第9巻第2号(2006/1/30)

[実践報告] ●岡山YMCA ファミリーキャンプの実践報告～信頼の上に成立するスモールコミュニティの拡充をめざして～ ●ポーン太の森自然冒険塾「今、求められる新しい自然体験のスタイル」

■第10巻第1号(2006/5/20) Camp Meeting in Japan 2006―第10回日本キャンプ会議 特集号

[口頭発表] ●キャンプにおけるカウンセラーレポートの意義―小笠原自然ふれあい学校をふりかえって ●おさお冒険クラブの取り組みとキャンプの報告 ●くろがね倶楽部キャンプ―野外活動を通してのコミュニティ ●ポーン太の森自然冒険塾 ●日本型キャンプを探る(1) ●指定管理者導入に伴う野外施設運営のあり方について ●指導補助員からみた自然学校の実態 ●リスクマップからみた安全意識の評価方法の検討 ●郷土を知る自然体験活動の事例報告 ●幼児キャンプ体験がその後に及ぼす影響 ●自然体験がひとりっ子の成長に与える成果 ●カウンセリング・キャンプにおける計画・実施のあり方における一考察 ●ふりかえり活動を導入したASEが参加者の学習効果に及ぼす影響 ●冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●シニア長期滞在型キャンプ「ふおーゆー白馬」 ●高齢者キャンプにおけるボランティアスタッフの期待と満足度 ●ユニバーサルキャンプ in むろと実践報告 ●看護学校における保健体育の授業展開 ●必修キャンプ実習が参加学生の気分面に及ぼす影響 ●授業として行う大学生のための海外アウトドア体験プログラム

[映像発表] ●教育キャンプ再考 ●キープ森のようちえん実践報告

[ポスター発表] ●リスクに対する感覚を磨く指導者トレーニング ●福祉士養成教育における予備実習としてのキャンプ実習 ●野生の森ゆめキャンプ報告―4年間の実践と研究 ●野外活動へのコミットメントを想定する要因について

■第10巻第2号(2006/9/30)

[実践報告] ●郷土を知る野外活動の実践報告―チャレンジ2702 ☆事業の試みから― ●ユニバーサルキャンプ2005 in むろと

[研究資料] ●「子どもと共に創るキャンプ」における学生の学び ●野外教育の実践・研究において答の出ていない問題

■第 10 巻第 3 号 (2007/3/30)

[実践報告] ●聴覚障害大学生を対象にしたキャンプ実習に関する事例報告 ●我が国初の WEA 野外教育指導者養成コースの実践報告 ●Coalition for Education in the Outdoors Eighth Biennial Research Symposium 参加報告

■第 11 巻第 1 号 (2007/5/19) Camp Meeting in Japan 2007 -第 11 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●2007 年は日本の組織キャンプ 100 周年か? ●日本の野外活動に対する中国天津市の大学生の理解程度と興味 ●アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民のキャンプ生活 ●最近 5 年間における野外教育研究の傾向 ●2007 ACA National Conference 参加報告 ●日本キャンプ協会国際交流委員会の働き-AOCF 創立- ●“WILDERNESS FIRST RESPONDER” 野外救急法資格取得コース ●組織キャンプ体験が子どもとその保護者へ及ぼす影響について ●看護専門学校での授業として行うキャンプにおける学生の学び ●デイ・キャンプで社会的スキルをより高めるには ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●学校教育における宿泊型自然体験活動の取り組みについて ●大学野外活動のプログラムの質向上に寄与するキャンプ道具の使用について ●ユニバーサルキャンプ 2006 実施報告

[ポスター発表] ●少年期の組織キャンプにおける Significant Life Experiences が成人後の環境行動に及ぼす影響 ●組織キャンプの魅力に関する研究~花山キャンプを事例として~ ●中学校における教科と自然体験活動の関連について ●キャンプカウンセラーの成長に関する研究 ●キャンプインストラクター養成カリキュラムの指導実習における受講者の心理的变化と自己評価 ●サンフレッチェ広島ジュニアチームキャンプ~10 年の軌跡~

■第 11 巻第 2 号 (2007/9/30)

[実践報告] ●あさお冒険クラブの仲間つくりとエコ・キャンプをめざして-野外活動を通して気づくこと-

[研究資料] ●キャンプ活動が睡眠に及ぼす影響 ●障害者キャンプにおけるバリアの研究-身体障害者模擬患者を通して- ●キャンプ実習における参加者の期待度・満足度に関する研究

■第 11 巻第 3 号 (2008/1/30)

[特集] ●不揃いの麦から作るビールの味には深みがある

[実践報告] ●キャンプ参加者が自己実現をはかるためのスタッフの支援について-白山市アドベンチャーキャンプの実践から-

[研究資料] ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●外国人チューターとのキャンプ経験がキャンプ参加者の意識や行動に与える影響

[報告] ●第 11 回日本キャンプ会議全体報告~みんなでつくるあしたのキャンプ (キャンプ場編) ~

■第 12 巻第 1 号 (2008/5/24) Camp Meeting in Japan 2008 -第 12 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●指定管理者団体における野外活動事業の参加者状況 ●民間野外教育活動団体におけるサービスマネジメントに関する将来予測研究 ●キャンプ参加費に関する保護者の意識 ●米国サマーキャンプの日課活動 (実修) について-メイン州、キャンプ・オーアトカの場合- ●知的障害児のキャンプ「ニコニコキャンプ」実践報告 ●ガンバレ! 能登震災支援キャンプ報告 ●冬の陣と雪の吟-「雪のスゴイ!」を体験しよう。冬の檜原湖キャンプ 2008 ●ぱるぱるキッズ 2007 実践報告 ●日本の野外活動に対する中国の (小学-大学) 男女学生の認知度 ●「社会力」を育成する教育プログラムの開発-プロジェクトアドベンチャーの手法を応用して- ●連想法を用いたキャンプの効果測定を試み ●新入生オリエンテーションキャンプが大学生の仮想的有能感に及ぼす効果 ●ファミリーを対象としたイベント型事業「あいちキャンプフェスティバル」の実践報告-他団体との連携と運営のポイントに着目して- ●『若者自立支援事業「本当にやりたい!」ことプロジェクト」実践報告』 ●サントリー・神戸 YMCA 共同プロジェクト-余島プロジェクト- ●「読書」による観想的キャンプ生活-中村春二口訳「方丈記」の野外教育的価値に注目して-

[ポスター発表] ●利用者アンケートにみる静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況 ●地域住民への自然体験活動の提供に向けた大学におけるシステムづくり ●自由回答からみる保護者のキャンプ参加費に対する意識 ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて-キャンプが青少年の成長に及ぼす効果- ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて-プログラムと自然・生活環境に着目して- ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて-参加者と指導者に着目して-

■第 12 巻第 2 号 (2008/9/30)

[実践報告] ●幼児キャンプの実践 ●キャンプを通じた地域づくりの試み「あしがらシニアキャンプ」

■第 12 巻第 3 号 (2009/1/31)

[実践報告] ●子どものキャンプ参加費用に対する保護者の意識-不満足評価の視点に着目して-

[報告] ●キャンプディレクター 2 級指導者の実態・意識調査に関する報告 ●第 12 回日本キャンプ会議全体報告~みんなでつくるあしたのキャンプ (指導者編) ~

■第 13 巻第 1 号 (2009/5/23) Camp Meeting in Japan 2009 -第 13 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●組織キャンプにおける儀式プログラムの意義と役割-米国キャンプ・オーアトカにおける騎士道プログラム- ●病氣とたたかう子どもたちに夢のキャンプを~医療設備を備えた日本初のキャンプ場開設に向けた、そらぶちキッズキャンプの取り組み~ ●休止スキー場を活用したキャンプの試み-白山市アドベンチャーキャンプの実践から- ●

指定管理者団体における野外活動事業の申込状況の推移 ●組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連 ●ロールレタリングを用いたスタッフトレーニングプログラムの開発 ●中国における野外専門運動基地の現状～天津市山野運動基地～ ●実地踏査等を重視し当事者意識を重視した養成プログラムで指導者になることの意義 ●教員・保育者をめざす女子大学生を対象としたチャレンジキャンプの実践報告 ●活動の質を高めるチャレンジとリラクセスの落差の追求ー日常生活に「持ち帰り・般化・敷衍・思い出し」可能なキャンプでの身体感覚・技法ー ●冒険キャンプにおけるキャンプ場面でのふりかえり体験の調査 ●長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える (1) ●体験がもたらす教育的効果 ●幼児とその保護者における自然体験の現状～子どもの育つ環境による自然体験の違い～ [ポスター発表] ●週末を活用した親子キャンプの試み～スケートキャンプの実践報告～ ●「スノーシューを履いて雪の原野での自然観察会」実践報告 ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関する調査ー1年目結果報告ー ●Means-End Analysisを用いたキャンプ効果の要因の検討 ●子育て支援としての「ママチルキャンプ」8年間の経緯と継続上の課題 ●小学校長期自然体験活動の効果とその要因～鹿沼市自然体験交流センターを事例として～ ●幼児キャンプにおけるイラストを用いた健康管理の試み

■第13巻第2号 (2009/11/30)

[実践報告] ●「20/20 Vision」と「多様性への挑戦」～2009年全米キャンプ会議に参加して～

[研究資料] ●教職を意識したキャンプ実習の一考察

[報告] ●第13回日本キャンプ会議全体報告～みんなでつくるあしたのキャンプ(安全管理編)～

■第14巻第1号 (2010/5/22) Camp Meeting in Japan 2010ー第14回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●保育者養成を目的とした組織キャンプの実践とその試み ●ホリスティックな教育キャンプ実践報告 ●

G.N.C.A. スプリングキャンプ『ドリームキャンプ』報告 ●JALTプログラム内容が参加者の自己概念変容に及ぼす影響

●キャンパーの志向によるキャンプの効果の表れ方の違いーつながり志向性・自然体験効果・感性の関係からの考察ー

●発達段階に応じたキャンプ効果の比較～メタ分析を用いて～ ●キャンプにおける場の力～ウィルダネス体験に着

目して～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩みーその1 ●WEA 2010 National Conference on Outdoor Leadership

参加報告 ●地域住民との協働によるフィールドづくりの試みーツリーハウスづくりの取り組みからーなぜバックカント

リースキーを求めるのか～バックカントリースキーへの移行に注目して～ ●地域活性化に貢献するキャンププログラム

に関する研究～コンジョイント分析の適用～ ●知的障害高等養護学校における自然体験活動の実態について

[ポスター発表] ●「生きる力」を育む効果的な野外教育プログラムの検討～「アイガモを食べる」体験プログラムの効果

測定～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩みーその2 ●玉川大学教育学部野外教育演習開講の背景と学生の取り組み

●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果～2ヶ年調査結果の分析～ ●ウェビング・テープを使った

チームビルディング「ラクーン・サークル」実践報告および体験 ●ラボキャンプ2009効果測定調査報告 ●体験型親

プログラムを取り入れた発達障害児キャンプの効果 ●アメリカ・キャンプ協会100年の歴史

■第14巻第2号 (2011/1/30)

[実践報告] ●「ドリームキャンプ」実践報告 ●水辺活動における指導者の「ヒヤリ・ハッと」調査～その後に生かせる対応策とは～ ●公園での野外教育実践～プレーパーク活動を通して～ ●大学と地域の連携による年間を通じた野外教育プログラムの展開

[研究資料] ●自然体験活動における子どもたちが求める理想の指導者 ●キャンプ場の施設評価に関する研究～山梨県の市営キャンプ場を例として～

[原著論文] ●野外活動施設利用者の満足度と再利用意図に関する研究 ●専門学校生対象のチームビルディングを目的としたキャンプ実習の効果 ●キャンププログラムにおける火の使用体験と火への認識・自己成長性との関連に関する研究

■第15巻 (2012/1/31)

[特集] ●子ども達の悲しみを支えるということーグリーンキャンプの試みにむけてー ●東日本大震災の被災者を対象とするグリーンキャンプの取り組み

[実践報告] ●キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者への意識調査の試み ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題 ●カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状 ●Hole in the Wall Camps～病児キャンプの世界的ネットワーク～

■第16巻 (2013/3/10)

[研究論文] ●キャンプ参加児童に対する教育効果と保護者の認識・期待との関連性

[実践報告] ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の実践とその成果 ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題ー第2報ー

■第17巻 (2014/3/10)

[研究論文] ●雪上キャンプにおけるイグルー内の環境に関する調査研究

[実践報告] ●南会津アドベンチャーキャンプの実践と地域連携の可能性 ●父子キャンプ(パパチルキャンプ)の実践

●「災害に備える」野外力をきたえよう～アウトドア体験キャンプの実践報告と今後の課題

■第 18 卷 (2015/2/15)

[研究論文] ●大切な人を亡くした子どものグリーフキャンプの実態とその効果に関する文献レビュー ●キャンプ体験が被災地児童のメンタルヘルスと生きる力に及ぼす影響 ●ハンディ気象計による気象リスクマネジメントの可能性～トムラウシ山遭難事故(2009) 報告書より～ ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析

[実践報告] ●Frost Valley YMCA の価値教育 ●自然体験がキャンプ指導者の野外指導スキルに及ぼす効果

[事業報告] ●グリーフキャンプ・フォーラム抄録「子どものグリーフサポート～地域社会の役割・キャンプの役割～」

●Camp Meeting in Japan 2014 ～第 18 回日本キャンプ会議～全体会報告 海外のキャンプ事情～日本の状況との比較から～

■第 19 卷 (2016/2/15)

[研究論文] ●不登校中学生を対象とした継続型キャンプの効果に関する検討ー社会教育施設と適応指導教室の連携事例ー

●テーマパークでの修行体験を利用した体験教育の試み～Kidzania 就業体験と野外教育の場合～ ●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす効果に関する研究

[実践報告] ●民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハットの分析 ●高校体育科キャンプ実習報告ースポーツ選手の基礎力を育むことを目指してー ●長期キャンプの意義を改めて考えるー「チャレンジキャンプ 2015～リヤカーで小豆島一周 110km の旅～」の事例からー ●くしろアウトドアキッズスクール 2015 冒険の旅の実践 ●キャンパス近くの自然を活かした活動及び重層的な指導システム

◆ CAMP MEETING IN JAPAN (日本キャンプ会議) 発表題目一覧

■第 1 回日本キャンプ会議 (1997/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[研究の部] ●グループ活動における心の安全について ●キャンプ指導者の状況認知に関する研究 ●日本における療育キャンプの歴史 ●キャンプ療法の確立にむけて ●雪中キャンプが及ぼす意識変化について ●ペグの打ち込み角と強度との関係について ●女子大生のキャンプ実習における血清脂質代謝変動について ●青少年の組織キャンプの運営におけるキャンプカウンセラーの貢献度 ●国立公園の意義とレンジャーの必要性 ●組織キャンプにおける選択プログラムの在り方について

[報告の部] ●自然環境下の保養体験による心理的・生理的变化 ●冬のサバイバルキャンプを通して ●「であい・ふれあい・かよいあい」の福祉の町で野外活動における障害者とともに歩む ●ぜん息児のサマーキャンプにおける運動適正テスト ●痴呆性老人と行うシニアキャンプ ●自閉症の人たちがキャンプを楽しむために ●「0-157」が青少年施設に与えた影響 ●盛岡大学におけるネイチャーゲーム実践報告 ●(神戸ー東京) 中学生・高校生ふれあいキャンプ ●静岡県キャンプカウンセラー協会の活動について

■第 2 回日本キャンプ会議 (1998/5/23、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[基調講演] ●全日本学生キャンプの草創

[研究の部] ●野外炊さんの薪(マキ)の代替燃料に関する研究 ●青年期の学校キャンププログラムに関する一考察 ●参加児童・生徒による冬季キャンプの評価 ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●喘息児キャンプにおける腹式呼吸を応用した室内ゲームの実践 ●グループを理解する～喘息児キャンプにおける A 子を通じて ●キャンプの評価～キャンパーが意識するキャンプの効果を中心として ●高齢者キャンプの効果について考える～血圧および血液循環動態に及ぼす影響 ●組織キャンプにおける選択プログラムのあり方について (2)

[報告の部] ●ACA アメリカキャンプ協会総会報告 ●OBS 冒険を通しての体験学習 ●こども糖尿病キャンプの現状と課題 ●フロンティアアドベンチャー事業のその後 (1) ●フロンティアアドベンチャー事業のその後 (2) ●自然生活体験キャンプ実践報告 ●青少年のボランティア体験としての福祉キャンプ ●野外活動指導者その専門家としての条件～横浜市野外活動指導者養成講座ジェネラルディレクターの立場から

■第 3 回日本キャンプ会議 (1999/5/22、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●台湾における童軍(ボーイスカウト)教育に関する研究 ●ACA 公認滞在型キャンプの分析 ●火打ち金による火付け法 ●キャンプにおける薪への着火についての実験的研究 ●自然教室における火起こしプログラムの理科実験的展開 ●星美ホームに於ける野外活動の可能性～日本横断徒歩旅行を通じて～ ●知的障害者社会就労センターのキャンプの実践 ●障害者キャンプの実際～木の実の森の実践～ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●進学塾における野外教育への取り組み ●市立キャンプ場・キャンプカウンセラー卒業生の活動について ●1ヶ月の長期自然体験キャンプ「心のふるさと村」報告 ●生きる力を育む自然教育けやの森学園スノーキャンプ実践報告 ●キャンプと NPO ●日本キャンプ協会の誕生 ●高齢者キャンプの効果について考える (Ⅱ) ～5泊6日のキャンプ生活における血圧、加速度脈波の変化～ ●思春期の女子キャンパーを理解する～性に対する関心を中心に～ ●野外活動の指導におけるアポトシス～活動の目的化をめざして～ ●キャンププログラムにおける軽登山中の水分摂取に関する研究～体育系学生のキャンプ実習～

■第4回日本キャンプ会議（2000/10/2～5、国立オリンピック記念青少年総合センター）

※第4回日本キャンプ会議は第5回国際キャンプ会議と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■第5回日本キャンプ会議（2001/5/19、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●幼児対象野外教育の実践報告 ●自然からの自己発見～共に創りあげる～ ●キャンプカウンセリングの体系化の試み
●長期キャンプにおける子どもの自主性の発達とその原因 ●知的障害児のソリ遊びキャンプ ●障害児キャンプの企画と運営—YMCA プロジェクト・SEED のケース— ●障害者キャンプを支えるボランティアのシステム～キャンピズの会員制度を中心に～ ●キャンプ・インストラクター課程認定校における認定プログラムの実践報告 ●登山用ストック使用の有無が登山者に与える影響 ●白馬シニアキャンプ協会設立レポート ●子どもの生活自立の「もと」を引き出す野外体験 ●サイエンスキャンプ ●キャンプと音楽 ●生ゴミサイロを利用した環境教育

■第6回日本キャンプ会議（2002/5/18、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●自然との接点への実践例としての提案 ●新しいキャンプへの取り組み—ハイテクキャンプと竹をテーマとした参加体験キャンプ ●夏季ゼミキャンプにおける他者観察の変動 ●戦前の社会事業におけるキャンプ活動 ●キャンプとする大学入試 ●山梨大学における学生主体型キャンプの実践報告—アウトドアパスーツの授業において ●丹波自然塾のあゆみ ●乳幼児と母親のためのキャンププログラム ●キャンプで気づく便利さについて ●課程認定校におけるキャンプ・インストラクター資格継続への試み ●児童・生徒におけるバックパッキングプログラムの実践報告 ●知的障害児のための教育キャンプの実践 ●知的障害ボーイスカウト・ローバー隊の北海道遠征 ●キャンプと音楽療法

■第7回日本キャンプ会議（2003/5/17、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●組織キャンプにおいてグループリーダーの書く記録 ●精神障害者側の立場から見たキャンプの必要性 ●不整地サイトにおける車椅子体験キャンプの実践 ●キャンプにおける参加者の「ソーシャルスキル」の変化について ●English Immersion Camp における子どもたちの変化と成長 ●ハワイ・カウアイ島アドベンチャーキャンプ2003 ●長期キャンプ“わんぱく子ども宿（10泊11日）”の効果 ●兵庫県自然学校指導補助員に関する調査 ●キャンプ・インストラクター取得者の活動への取り組み ●親子参加型自然学校に関する調査 ●キャンプと音楽療法2 ●多摩川を題材とした環境教育的プログラムの提案 ●馬との関わりが対人関係に及ぼす効果 ●体験学習としてのキャンプ ●キャンプにおける女子高校生の自己概念の変容課程 ●登山下山の不安と疲労に関する研究 ●空気圧縮式発火具をつくる ●キャンプに「軍手」は万能でない ●焚き火のイメージに関する研究

■第8回日本キャンプ会議（2004/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●自然体験活動指導者の動機に関する研究 ●幼少年期の自然や人の関わりと自然体験活動への興味の関連について ●キャンプ中の感情の変化について ●子どもを主体にした新しいキャンプ ●沖縄わんぱくキャンプ ●学校へのキャンプの誘い ●「自然体験冬の陣」を通してのスタッフの学び ●大学生を集めるCAMP ●組織キャンプと社会福祉 ●キャンプインフォメーションセンター相談記録より ●Leave No Trace アメリカの野外教育指導者養成における実践 ●アメリカにおける野外教育指導者カリキュラム相談記録より ●幼児のための雪上野外活動 ●第27回ウィンタースクール実践報告

■Camp Meeting in Japan 2005 —第9回日本キャンプ会議（2005/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●野外教育指導者養成キャンプの実践報告 ●大学カリキュラムにおける野外教育プログラム ●子どものための週末キャンプ ●授業として試みたアラスカ犬ぞり体験プログラム ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●第12回わいわいチャレンジキャンプ実践報告 ●2004夏の体験学習 夏！君の勇気にか・ん・ぱ・い ●母親グループが運営する自閉症児の雪上キャンプ ●野外教育セミナー in ニューヨーク報告 ●ACA National Conference 参加報告 ●国際自然大学校日野春校の取り組み ●自然体験活動冬の陣イグルー完成（映像発表） ●雪上キャンプでの敷物の断熱効果実験 ●キャンパーが影響を受けた活動について ●野外トイレの研究 ●自然学校が与えた影響について ●山村留学における相談員の業務 ●キャンプにおける呼称についての研究 ●自然体験活動におけるボランティア指導者の意識に関する研究 ●災害と野外活動（私の体験） ●OBSプログラム継続参加者のセルフエフィカシーの変容 ●ふりかえりがキャンプの効果に及ぼす影響 ●異文化交流キャンプが参加者の国民性理解に及ぼす影響 ●アジアキャンプ連盟（ACF）の創立

■第15回Camp Meeting in Japan 2011（2011/9/22～25、静岡県立朝霧野外活動センター）

※第15回日本キャンプ会議は日本キャンプ協会設立45周年記念 第20回全国キャンプ大会 CAMP FESTA 富士・朝霧と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■Camp Meeting in Japan 2012 —第16回日本キャンプ会議（2012/5/26、国立オリンピック記念青少年総合センター）

[特別講演] ●「グリーフ（ワーク）×キャンプ」にできること
[口頭発表] ●防災教育に必要とされるキャンプ技術～石巻での21日間の支援から～ ●「～のんびり遊ぼう～ニコニコキャンプ!!」リフレッシュキャンプの実践報告 ●「福島の子供たちとその家族に笑顔を」～アカデミーキャンプの実践報告～ ●YMCA フレンドシップキャンプ—子どもらしく過ごせる時間を取り戻す ●県外避難者の子どものケアと

キャンプ ●三鷹子どもの楽校 福島の子どもたちと森の楽校サマーキャンプ～「つくる」を遊ぶ夏季学校～ ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査—その1 ●レスキューザックの開発と効果 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームの開発 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームのデモンストレーション ●キャンプ指導者養成におけるスキル習得に関する考察 ●沖縄の無人島キャンプにおける自己・他者肯定感の変容 ●年間利用者8,000人超の「立少トントンたんけん隊」の実態と今後の展望 ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その1 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響—その1 ●大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題（第2報）

[ポスター発表] ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果(3) —4ヶ年調査結果の分析— ●東日本大震災被災地でのグリーンキャンプの実施報告「岩手しぜんとあそびキャンプ in テンパーク」の取り組み ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その2 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響—その2 ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査—その2

■ Camp Meeting in Japan 2013 —第17回日本キャンプ会議（2013/5/25、国立オリンピック記念青少年総合センター）

[口頭発表] ●社員教育研修としての野外活動プログラムの可能性—Outdoor Training Programを導入したTS Camp— ●参加目的に着目した組織キャンプ参加者の特徴—白山市アドベンチャーキャンプの実践から— ●多文化での野外教育プログラムから考えたこと ●冒険的自然体験キャンプ「私たちの4日間」 ●幼稚園・保育園との連携～あかぎの森のようちえん実践報告～ ●岡山県の中山間地域における自然体験活動の実践報告 ●グリーンケアキャンプに参加して～被災地の子どもたちとともに～ ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●静岡県における不登校キャンプの取り組みについて ●国立青少年教育施設の取り組み—新しい公共型運営について—国立赤城青少年交流の家取り組みから— ●自然体験活動におけるマダニ対策について考える～広島県での取り組み（報告）～

[ワークショップ発表] ●ウィルダネス教育協会指導者資格認定コースの報告と今後の展望 ●キャンプで使える「手話」表現

■ Camp Meeting in Japan 2014 —第18回日本キャンプ会議（2014/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター）

[口頭発表] ●LEAVE NO TRACEの日本での必要性和普及について ●環境ボランティアリーダー海外研修（ドイツ）報告 ●組織キャンプにおけるLeave No Traceプログラムが参加者の環境に対する態度に及ぼす効果 ●東京YWCA森林ワークキャンプ～プロに学ぶ森づくり体験～ ●ウィルダネス教育におけるウィルダネスの場についての検討～わが国での実践にあたって～ ●国際ワークキャンプ参加報告と参加動機に関する調査 ●キャンプカウンセラーのユーモア表出が参加者の集団雰囲気と及ぼす効果 ●大学野外実習が体力・メンタルに及ぼす効果に関する研究 ●キャンプの力はこんなところにも！～ストレス耐性を高める効果～ ●ICUジュニアキャンパス・キャンプ～大学施設を使った大学らしい子どもキャンプの実践～ ●関東甲信越地区青少年施設協議会青年部会の取り組み～アメージングガイドができるまで～ ●災害時対策教育プログラムの実践について

[ポスター発表] ●キャンプの国際比較 その1「日本型キャンプ」をさぐる 1-2 日本のキャンプスタイル ●岡山県A大学におけるキャンプインストラクター養成実習の現状と改善策 ●地域のチカラを活かしたコラボレーション～通年型農業キャンプ 風っ子ファームの取り組み～ ●南会津アドベンチャーキャンプの事業評価と地域連携 ●青少年の体験活動等に関する実態調査（平成24年度調査）の報告

[あれこれ発表] ●『ハンディ気象観測ツール』によるアウトドアリスクマネジメント ●アメリカ組織キャンプからの学び ●続・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～ ●One Minute Camp Evaluation Experiential Education Evaluation Form 改訂版の体験

[全体会] ●海外のキャンプ事情～日本の状況との比較から～

■ Camp Meeting in Japan 2015 —第19回日本キャンプ会議（2015/5/30、国立オリンピック記念青少年総合センター）

[口頭発表] ●わが国におけるアウトワード・バウンドを基礎とした冒険教育の動向についての考察～文献による調査を通して～ ●Day Campの可能性～1日の中で子どもたちに主体をあずける～ ●米国キャンプ・オーアトカ（Camp O-AT-KA）における日課プログラムの意義—余暇教育としてのキャンプ・プログラム— ●北海道教育大学岩見沢校における指導者養成 ●キャンプが児童のアサーション行動に及ぼす影響 ●登山におけるストレスコーピングに関する研究 ●スポーツチームに対するASEプログラム導入が集団凝集性に及ぼす影響—チーム所属年数に着目して— ●WEA野外指導者養成コースにおける野外指導スキルの発達 ●災害ボランティアとキャンプ ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析 ●スキーキャンプのヒヤリハット ●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす影響 ●大学の授業としての、場に注目したカナダ厳寒期の多国籍遠征 ●あかぎワールドコミュニティ～余暇教育としてのキャンププログラム～ ●自然体験で地域づくり まえばし・マイはし・プロジェクト ●「海ガキ・山ガキになろう！2014夏」実践報告

[ポスター発表] ●公園における親子を対象とした自然体験活動プログラムの可能性 ●キャンプ体験が参加児童の道徳性に及ぼす影響 ●静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況の推移とアンケートから施設の可能性と課題を探る ●Café

de CAMP の作り方ー参加者をつくる空間ー

[あれこれ発表] ●続々・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～ ●工作体験（お箸づくり）を通じての安全で正しいナイフの使い方ービクトリノックス工作イベントサポートプログラムー ●ハンディ気象観測ツールによるアウトドアリスクマネジメント（実践編）

[全体会] 子どもシンポジウム ●ろう（聾）の子どものためのキャンプ～デフキッズキャンプ～ ●被災地域の子どものためのキャンプー南会津アドベンチャーキャンプー

■ Camp Meeting in Japan 2016 ー第 20 回日本キャンプミーティング（2016/6/4、国立オリンピック記念青少年総合センター）

[ポスター発表] (研究発表) ●国立青少年教育施設における冒険教育プログラムの取組ージュニアチャレンジ淡路島一周ー

●キャンプ体験が小中学生のアサーティブに及ぼす影響 ●大学キャンプ実習におけるストレスとストレスコーピングに関する研究 ●体育授業における ASE の効果について ●森のようちえん活動が幼児の運動能力に及ぼす影響（実践発表） ●わが国におけるリープ・ノー・トレイスのこれまでの取り組みと今後の展望について ●知的障がい者に対する日常生活に変化を作り出す地域生活支援ーユニバーサルキャンプを通してー ●チャレンジキャンプ 2015 ～リヤカーで小豆島一周 110 km の旅～ ●千葉市少年自然の家主催事業「セブンデイズキャンプ」の実践報告 ●オフザピッチトレーニングとしての雪上野外研修プログラムの実践 ●保育内容研究と自然・生活・あそび ●大学授業での長期バックカントリーキャンプ ●ろう・難聴の子どもキャンプに参加した聞こえるスタッフのふりかえり～デフキッズキャンプの実践から～ ●町田ゼルビアにおける自然体験活動の実践報告 ●2015 年多摩の自然学校 ●無人島キャンプの実践 ●米国大陸横断体験記

[ワークショップ発表] ●キャンプで美味しい！コーヒーの入れ方教室 ●フィールドワーカーのための危険生物“ハチ” “ヘビ” 対策セミナー&交流会 ●私たちはリスクに対する説明責任をどう果たすのか How do we achieve accountability for risk? ●環境教育プログラム「プロジェクト・ワイルド」を体験してみよう

※ Camp Meeting in Japan 2006 ー第 10 回日本キャンプ会議から Camp Meeting in Japan 2010 ー第 14 回日本キャンプ会議までの発表抄録集は『キャンプ研究』（毎巻第 1 号）として編集されています。

※『キャンプ研究』および『日本キャンプ会議抄録集』は有料で頒布いたします。ご希望の方は、日本キャンプ協会事務局までご連絡ください。

- ・『キャンプ研究』 各 1,029 円（税・送料込み）
- ・『日本キャンプ会議抄録集』 各 1,029 円（税・送料込み）

なお、以下は完売しました。

- ・『キャンプ研究』第 2 巻、第 4 巻第 1 号、第 12 巻第 3 号
- ・『日本キャンプ会議抄録集』第 1 回～第 5 回

編集後記

本協会設立50周年を迎えた2016年は、さまざまな記念行事を行いました。なかでも、キャンプの実践やキャンプに関連した研究発表を行なう場として、6月に開催された第20回日本キャンプミーティング、10月末に開催された第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会では、それぞれ多くの実践報告と研究発表が行なわれました。こうしたこともあり、第20巻目となる今回の『キャンプ研究』には、2点の実践報告と講演録、特別寄稿の合計4点の掲載となりました。

「野外救急法を取り巻く最新の動向」は、野外救急法の国際的な動きとともに国内の現状を分析し、野外指導者が身につけたほうが望ましい救急法について報告しています。また、我が国でも野外業界全体で体系的に救急法の標準化を進めることや、社会に対して説明責任を果たさなければならない時期が来ていることも指摘しており、今後の動向にも注目です。「ろう児のキャンプにおける親プログラム実践の成果と考察」は、キャンプに参加する親自身がろう者講師による活動を体験し、それをもとに子ども達にプログラムを提供した成果と課題を報告しており、ろう児の野外活動での支援方法を提示した貴重な内容でした。「Organized Camping in Japan」は、第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会基調講演の記録です。日本のキャンプの歴史、キャンプの意義と効果、野外教育の特性など、キャンプや野外教育に携わる人たちが押さえておいた方がよい内容と、キャンプ体験を通じた文化の伝承についての興味深い内容でした。「組織キャンプの先駆者小西孝彦が残したもの」は、2015年に他界された小西孝彦氏の功績を称える特別寄稿です。キャンプ界に多くの影響を与えた先駆者の業績を紐解く内容から、日本のキャンプの原点を知ることができました。

いずれの原稿もキャンプの価値や魅力を広く世間に伝えるために重要なものでした。「キャンプ研究」では、引き続き多様なキャンプの研究報告、実践報告を掲載し、広く社会へキャンプをアピールしていきたいと思えます。次号もみなさまからの投稿をお待ちしています。

キャンプ研究

第20巻

2017年2月15日発行

編集発行者 公益社団法人日本キャンプ協会 キャンプ研究編集事務局

発行所 公益社団法人日本キャンプ協会

NATIONAL CAMPING ASSOCIATION OF JAPAN



NCAJ

National Camping Association of Japan

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

国立オリンピック記念青少年総合センター内

TEL 03-3469-0217

FAX 03-3469-0504

E-mail ncaj@camping.or.jp

©公益社団法人日本キャンプ協会 写真、論文、資料のコピー、複製・転載を希望される場合は、ご連絡ください。

キャンプ研究

第20巻
2017年2月発行

ISBN978-4-904008-11-9
C9075 ¥1000E



9784904008119



1929075010006

▲実践報告

野外救急法を取り巻く最新の動向

岡村 泰斗・高山 昌紀

ろう児のキャンプにおける親プログラム実践の成果と考察

廣瀬 彩奈・久保香菜子

▲講演録

第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会 基調講演

— Organized Camping in Japan —

星野 敏男

▲特別寄稿

組織キャンプの先駆者 小西孝彦が残したもの

石田 易司



NCAJ

National Camping Association of Japan

公益社団法人日本キャンプ協会

定価 1,080円(本体1,000円)